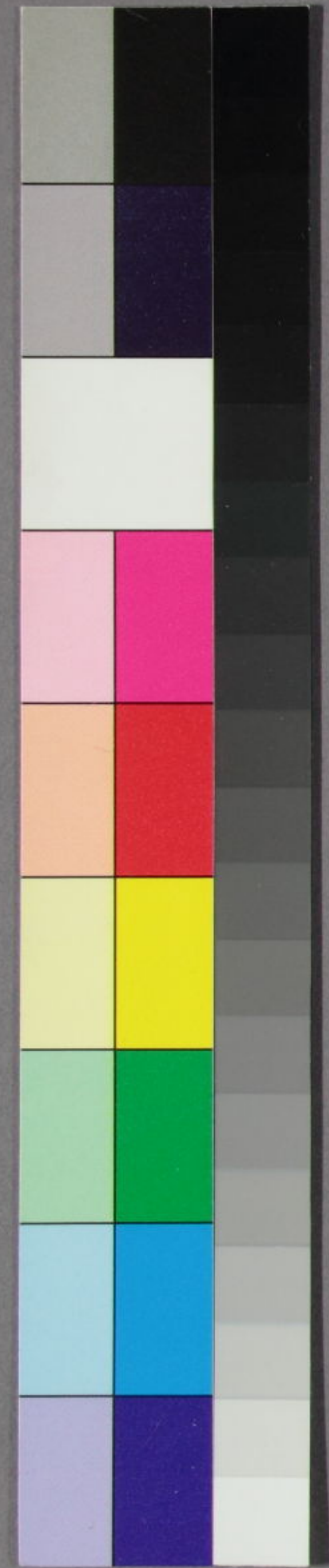


燕石
十種
神代餘波

三輯
貳

10
679
22



特
679
22

燕石十種中三輯二之卷

神代餘波

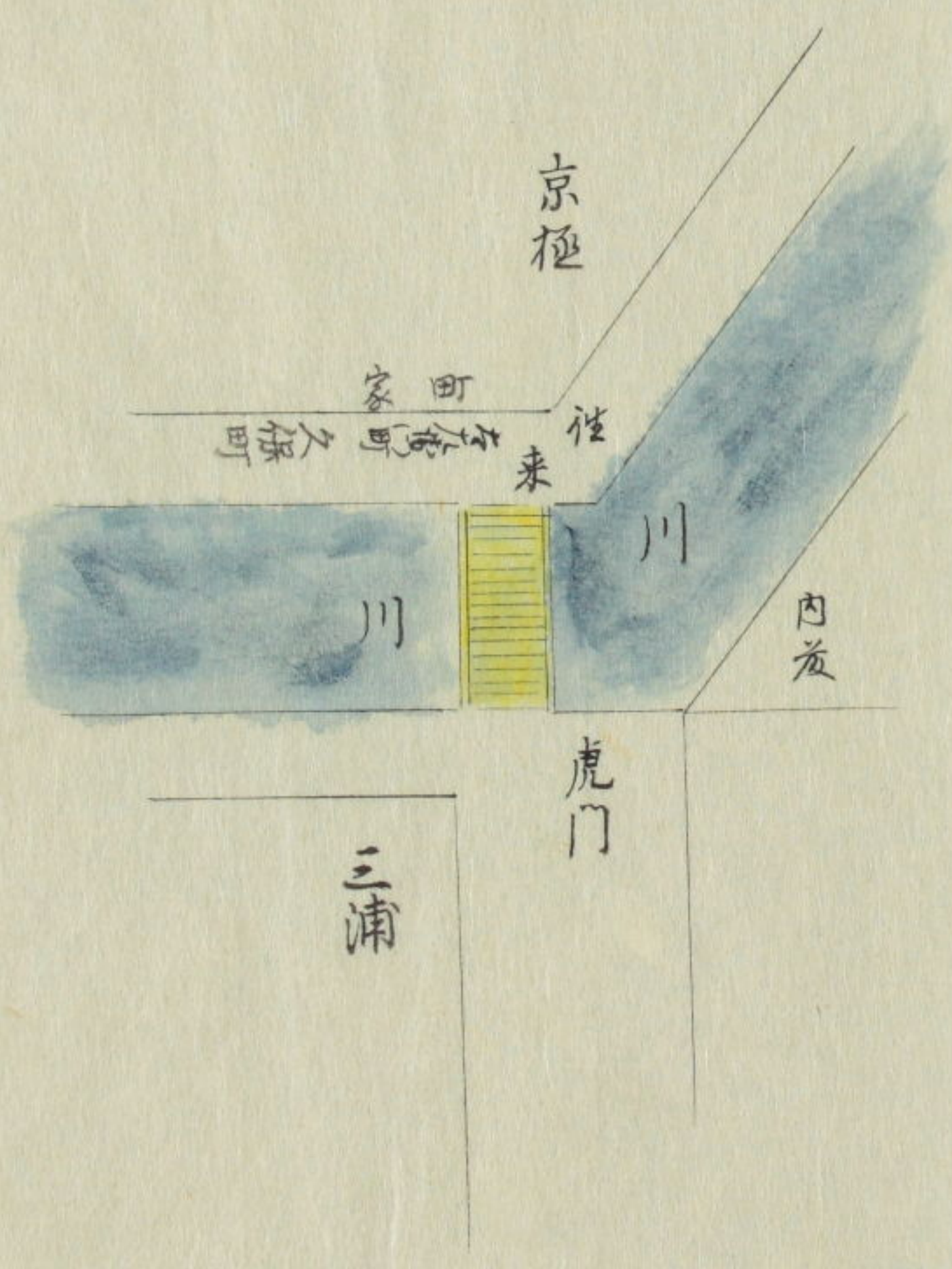


ちまを^天る神代よ^地ら^奇く^量く^めた^事なる事
 ろ^天ら^地めつ^地もの始^事は^事は^事と^事は^事神乃^事沖^事こ^事と
 以^事い^事人^事種^事さ^事ら^事り^事し^事て^事を^事り^事志^事る^事く^事き^事か^事き^事ら^事り
 あ^事ら^事ぬ^事を^事小^事ざ^事ら^事う^事き^事人^事こ^事の^事あ^事ら^事り^事は^事な^事ら^事せ^事ら^事る^事事
 の^事正^事しく^事あ^事り^事し^事を^事い^事ら^事り^事も^事も^事い^事ら^事り^事言^事と^事も^事い^事ひ
 こ^事ら^事せ^事ら^事か^事ら^事ぬ^事人^事の^事い^事ひ^事井^事の内^事乃^事陸^事が^事大^事ら^事を^事あ^事ら^事る^事事
 繩^事を^事釣^事繩^事を^事し^事深^事き^事井^事よ^事水^事を^事し^事と^事思^事ふ^事い^事と^事
 き^事お^事ら^事る^事人^事の^事お^事の^事ま^事若^事ら^事り^事し^事は^事年^事老^事る^事人^事の^事昔^事お^事緒^事
 を^事思^事ふ^事い^事と^事さ^事ら^事る^事事^事あ^事ら^事んと^事強^事い^事ら^事し^事を^事年^事月^事乃^事

難い業ゆゑ事唐土天竺の更にもいづ一天四海中ふとあまづくづる
 大都會あるは春夏秋冬の移ひつらるるが如くきの帷子の肩ぬき裾
 けて汗流しつるが如く厚衣いともうさるゝ埋火のりともかまざる
 が如くあるを志すぬ人のさう言と思ふのりおのをも考りし時と今い
 くさりのぬる事どもをいささ書あるせり程忘はる事又始より見
 づかぬ心よとめざる事あどあゆまあるべし思ひ出さるるあま
 後の書加つる事もやあらん
 ○虎御門外川岸つゞき土橋介までが町ありて御門前向ハ金毘
 羅酒を異名として毎月十日京極屋は金毘羅一徳の神酒
 の小樽數千心の如くつゞき並て目よまはり其さうり今ハ火除地
 なるなり

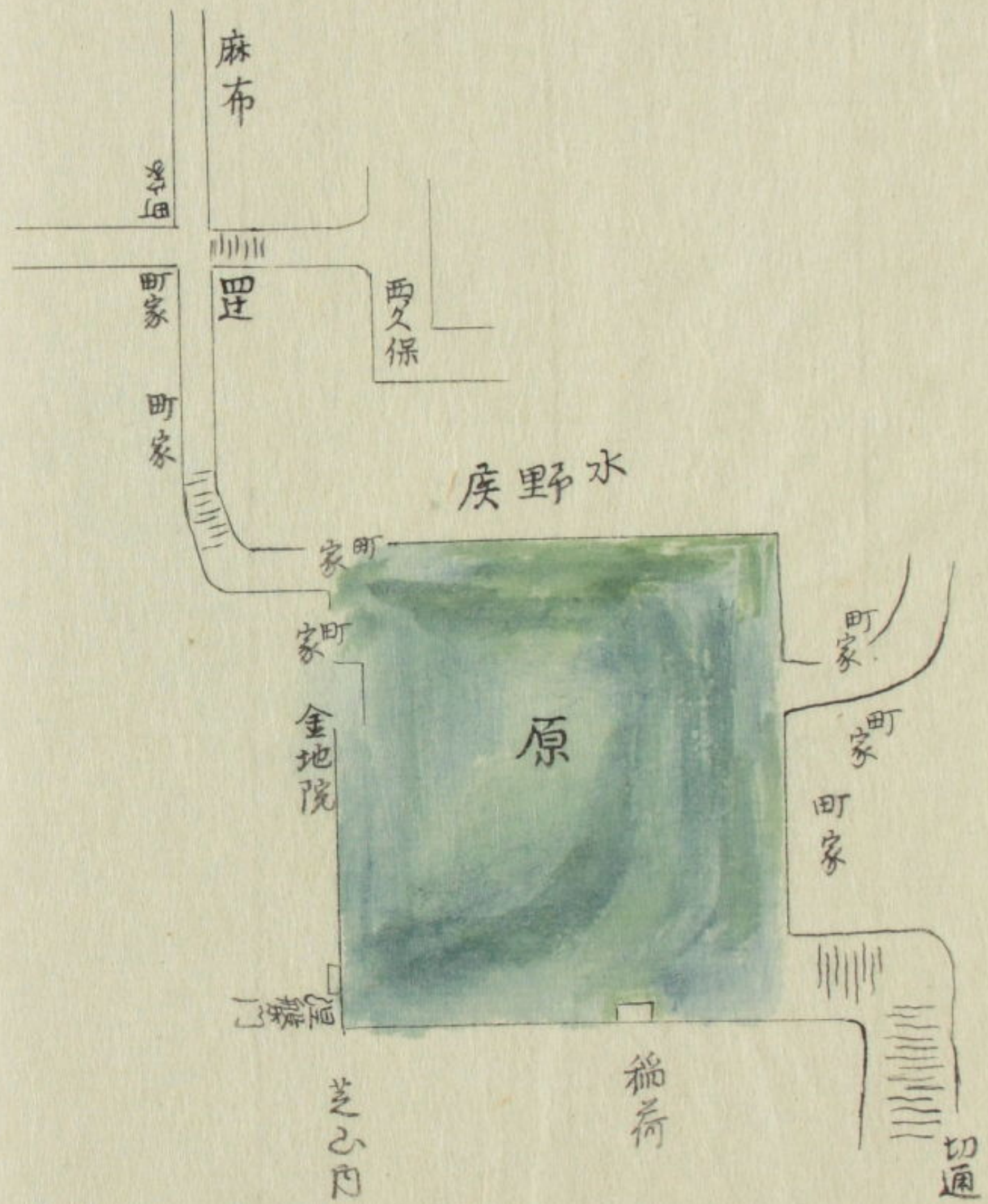
小サカ
 二十位

芝切通一上の廣き原を軍後師賣ト者淨獨理より性賣師豆花
 喇師酒賣菓子賣あどりりて娘ハ一を今は増上寺の因圓ハこ
 ちもさうり又涅槃門ハ切通坂の幸ふちりて通りぬるさうりふあは
 屈曲の細道ありしを今ハ上のさうりて新坂廣くなりて通り



自由なり金地院も入口の門ハ町家の並びよりありし之程も切通より
口ふありしに

小サ
二寸半
ト



○麻布まじり穴ハ細く曲りたる道少して片方ハ小竹のたもと生茂り片方ハ町家入

元の家より道二三のりたる道を今ハ一筋の廣居となりて結々幸也

○目黒不動のそばにわのりき茶屋ありし之農家よりあやげある酒食

賣(ど廿七八)のかわりもあうりしを今ハ都會の業(キト)き酒店ありと出

来り

○堀の内雜司ヶ谷あとも薩(ヨシズ)張の麻略ある茶屋ありと今ハ目黒と

等(キト)並(ナミ)となりたり

○安永二年の次濱町酒井屋(當侍ハ安彦屋)沖倉及赤大川(新地筑山)と中洲(ナカズ)

号く夏の納涼花火あとの次いともあつてから賣女ありしなまをも

繁花ありしを寛政二年の次取らるるまでとの海とありしと具名(ナガナ)残

流とありし今ハ薩(サシ)流(ユリ)のなほあせり

○芝神明社内本社の右に方(カウ)遊女町之増と寺大門前より見えハ偶々

奥彦安橋の橋より並んで見えしと

○土橋介いづら廣き所魚商人お三人をわらへて商ひしつものあり
 とありていづらをさして買ふ人多くありし福よなりといふがげつら
 後のいづらき魚店を並びいづら取らむといふなり

○芝赤羽根橋のらふこれ村お二人の魚商人休らひいづらありて魚店を
 つき又取らむいづら事土橋と因ト板あり

○八町堀中多彦御門前廣き所法商人賣卜者いづら豆蔵ありあり
 て旅いづら淵川岸の溜家軒を並へりしを今も絶果て所も狭く
 ありなり

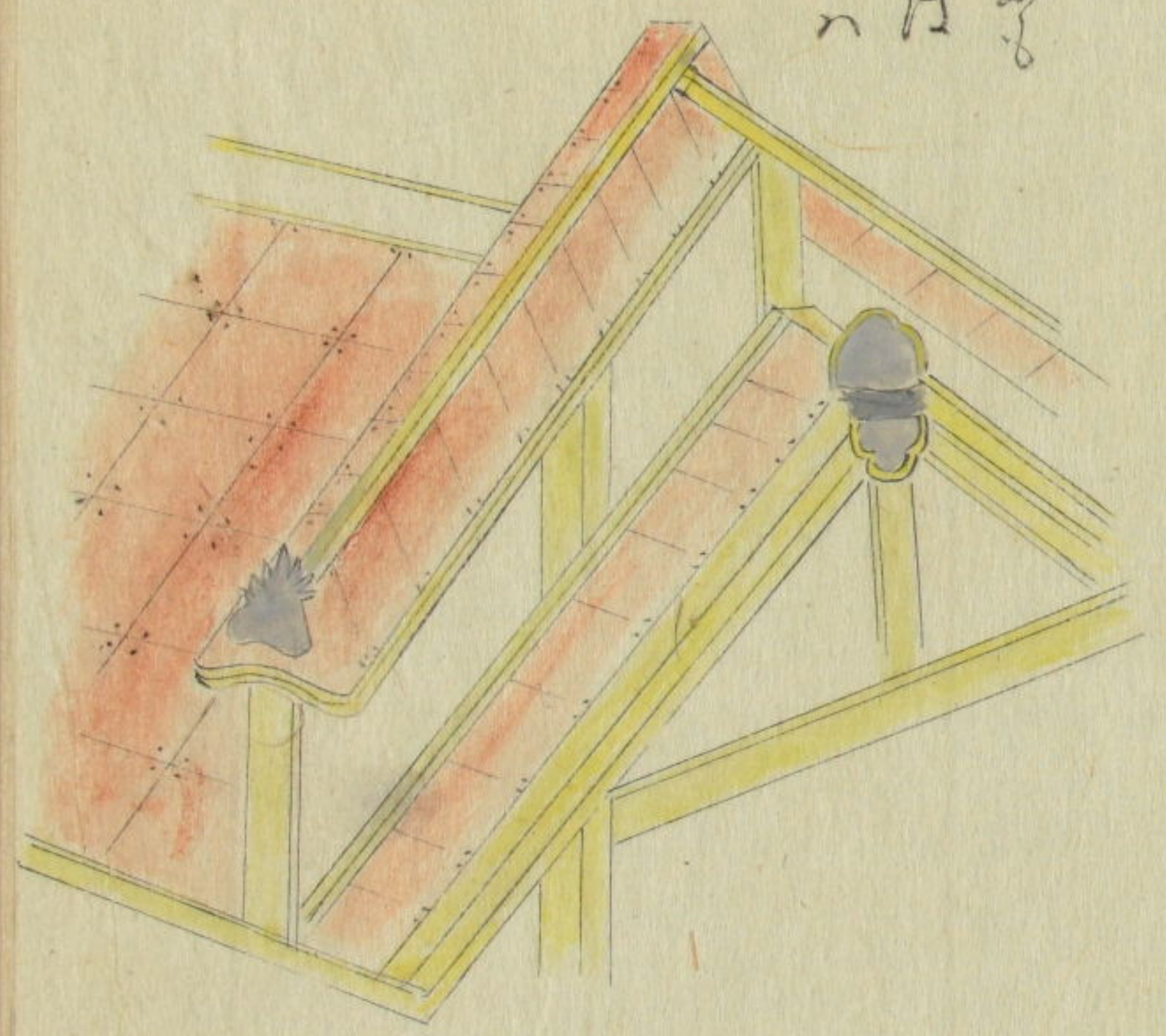
○赤根町四丁目の東の所も廣き所南北の通りたる馬場ありて借馬師
 あり居て雜人仕具のいづら價をてふありしむ事常之又賣卜者よみ
 りいづら法の商人物賣師豆蔵あり居て狭いを今も所も狭く
 ありて改て馬場を東西に通い豆蔵少彦津福理小倉のそ強なり

○下谷尾の茶をこらうと又市谷八幡平川天神を介社内と又町と裏通

新道ありの裏屋は安賣女ありありをつぎいづら絶をて今もひと
 所もあり下谷をいづら尾賣女ありあり

○大傳馬町二丁目のお側本郷同屋ありて他高臺の家ありいづらも銅尾あり
 考除といふあり遠三ありといふありいづら戸ありと世一町あり

類焼くは小屋あり
 考除ありしを今も
 大方保く三四あり
 のこもなり



○安永の頃までハ男の辨月代大きく髪短くえ結多々巻て衣袴も羽織
 田舎たけぞうく草巾袴うりしを文明の頃より月代ちひさく髪長く
 多く袴首の如く結ハ衣羽織つけ長く草幅廣く鼻紙を今も小菊紙
 二枚ありて入て廣くして羽も言を思きて聞取つてきを通言といひ
 さる人を通人とも大通ともいり安永以前の姿ある人を昔風とも野暮ヤボ
 いして野暮のそをいしを述きハ又むうの世暮がまかりゆく當
 世風となり大通が古風となりたり時代のうつりゆくのをさやうあり
 事二休の老天ふを風を忘も歳々その雪霜の暑熱を去りてさうの
 ころ

天保氏の大通人



天保氏の野暮人

二才位

○新嘉永むうハ系橋佐何柳何のきふありしハ我ハあハ後大門口通う
 たりしハまもあハ今ハあふのあきてハむハの事端と云と思つてハ
 きくハの廊 御免ありて之をさうハ御評定所ハ御役人ハ御酒飯を

御頂戴は給仕のたのしみ遊女三人づ出て勤仕せしと今今振るといひ
ふいりふらんとふらふ事あつてもおりのほいどふも今今目あきて
ひすしを粧しといひ小量こむう一京橋系の遊女がはよき紅梅の枝友集集記
「君あつて誰より見せん梅の花色をも香をもあつて人を知らずと書ける籠舟
を鑑いつちく禿ふりせヒラウド遊女人により馬九太郎言の卿よりしうぶたふ
筆より給ひてそ籠舟のうらふ「君あつて誰より見せん梅の花色をも香
をも知る人ぞ志ると書ける」給ひしうぶ及り今の御代は遊女
人にもく控前の禿あどけなきにあつては御定座むぢう偽といひしうぶ
そ籠舟の表裏二枚と一対の表裏とありて光彦卿ワム鸚鵡返カシと号して或
個々の御代とあまり

○天明の頃或國と新吉原を見物し給りんとて由緒ありて御父は山内侍とて
御家紋の先狭若對の二本陰袋入長刀凡折今あまの山内侍とて大門を
入仲の町より東西廓中巡見しと帰り給ひし事ありそ後と絶くさる

事なり

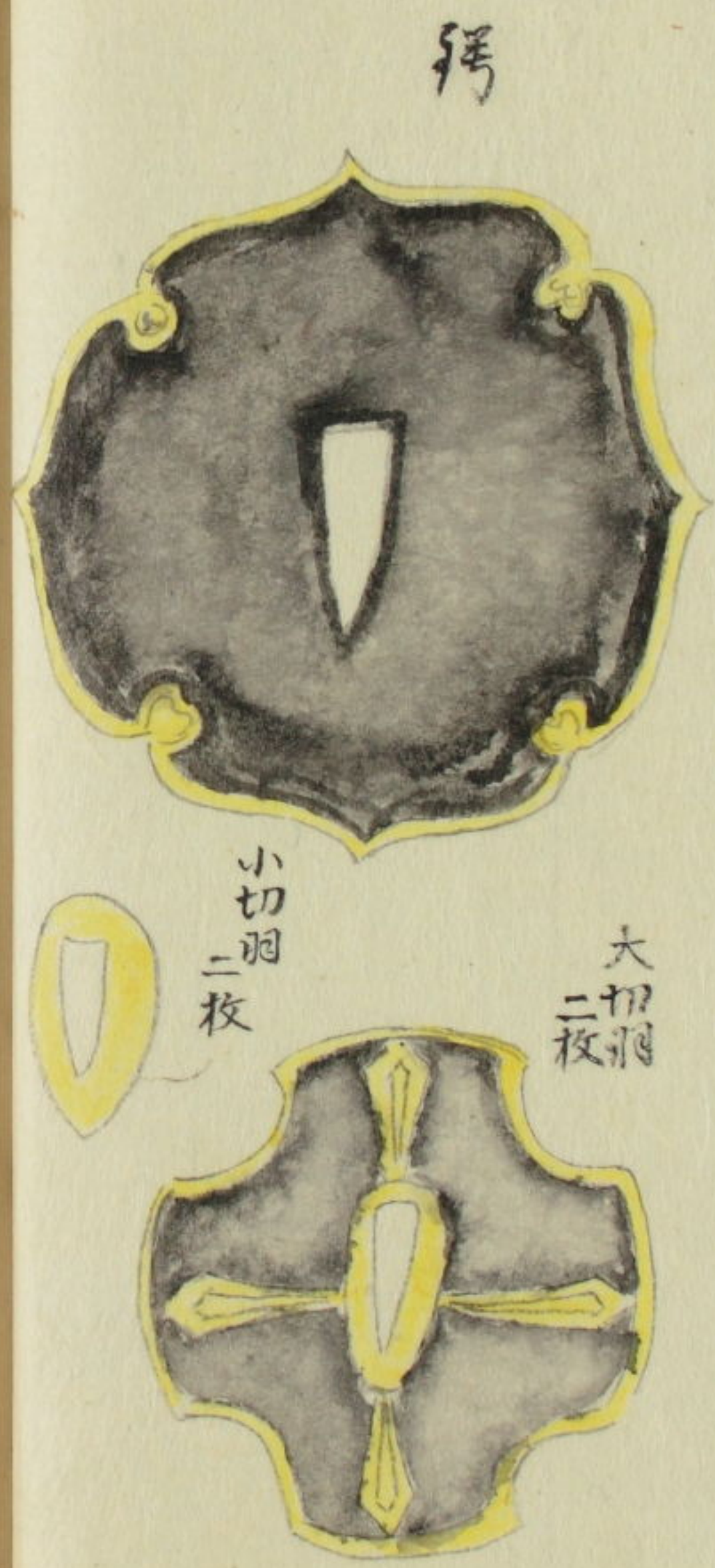
○佃島の隣の石川端といふりて石川八左衛門及山内侍とて舟あておれし給ひ
事始は鉄炮洲川岸ふ假小屋を造りて百次ヒラウドの侍お居りしそ後山内侍
ありて今まは人々高とありまは町人の物並場とあまり

○京橋弓町いさし其介も弓師矢師ヒラウド鞍師ヒラウド強師ヒラウド鞍師ヒラウドあどわふありし
を今は強師のとい絶くあつたり今も弓射人のまづ強造事と
ありしをさるる職人奇合も強師あり今もまづ矢を射人もあれば
後には矢師も絶やせん弓おの人はいまもなま弓師といふも始りし事
あつて昨日本橋を表裏より買取て鑑ひし事ありいふ九本弓の
以て武士まづ造りし事と夫本集「ヒラウド」をばらきし海よりふらり
橋もまづの櫓の片を「ヒラウド」とてさるる櫓のよめつさせぬ意は
我おとろくぬ又竹木を合せしめめ同集「ヒラウド」棒弓末まで通る
ふせ竹よもあれつても繋ぎ中二つ

新吉原集
一説もまづとあつて

○恭平の沖代小割と急りゆり或も武をこき花車風流増長して
 後藤ふ流を刀振るうのびのそ受属よ大小對經くやうびつる新を好
 のるをふくむく田舎或はがゆきしけりも長きく長級經刀を
 十文字よきし肩肘張ありくを野暮人と呼りしを今もや葉
 入りて此頃へくもかこもを刀造とらひして古風の合口の經刀
 五人多しさるる今も葵鐔大切羽ありをまきりま本集よ
 けのいまさる報はあひび鐔心ありたる金だくともね

七ノカ
一ノ五

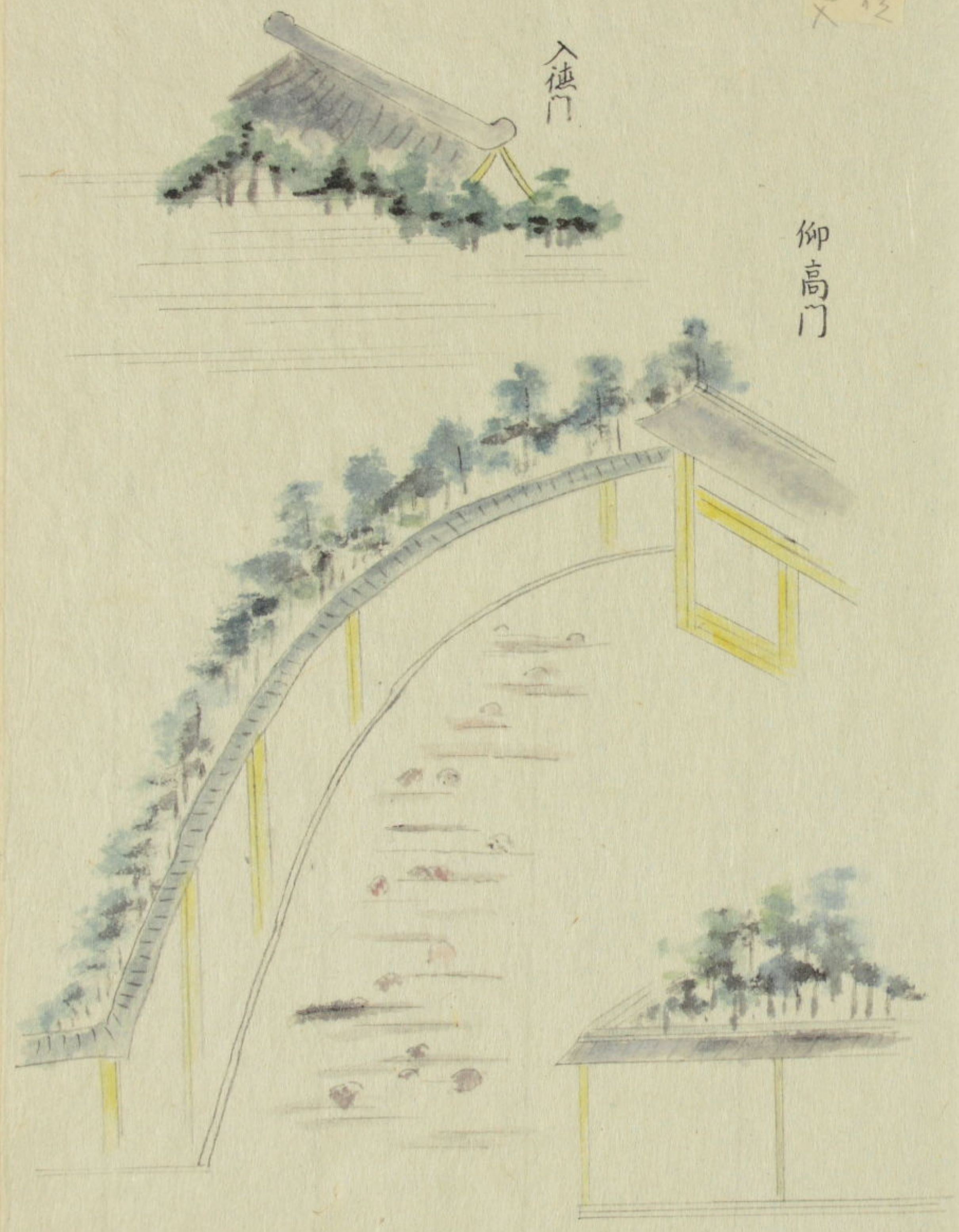


○靈岸邊の近き頂築立新地るあき左ふ踏ありたる大地うづくを俗よ
 薬蕪コンニャクといひしそらふ偶家ありて旅りかろしお今も高家地
 ○南町御奉行所より小野田氏の犯せる罪ツミ弘明へ給ふおの酒級与力の
 中村又花ハナ遊ユウ峯ミネありし小洋席小終て奇の端ハシありそれよりして
 眾白状シロバウよ及びしよしよあき功イサツあり其奇小野田氏「うきぬとも
 いうてあき名よ朽ぬぎ何をたごの表のやまうし中村氏「うきぬ
 とも根をあうしよし朽ぬぎ一眾を紅の表れ下草のうしを感
 して白状よ及びしとちん遊峯の加藤千彦翁の門今も我志る
 人あり

○天明六年丙午の年の年の初まより春をまきてゆく火災おつてきて夏は
 日々の大雨晴写あく秋は洪らありて家を流し人馬をおぼらし田畠を
 流ししるるよ遊七午丁未のころ世に二統胤障よ及びしよ集り
 来るもちやう衆群といひ流りもあれを町の家を打崩しありけり

正徳元年日蝕
 皆くは真実の
 事し法度大
 半は空
 出はれり
 取はれり

其辰
二七
七
字
入



あめりもあまのりも人馬たふさふさしてさうはさし里ありとも百二十里
 余之鏡友集の「あまのり」といふもの同じ名ありといふありぬあまのり
 此の系大田道漢侯の「白狐おるぬらも有るり夕まの定より廣きむさ
 し」の系
 ○聖堂元禄四年東敷より湯治くらのさけり堀堀より見ると所の坂ありて
 西を並た右堀の内は樹木ありて小ざら〜とのろ右斜よりして門
 ありいと庭略し〜を寛政十一年英藩ふいり〜感
 しい系仍沖代のち〜なる〜

麻利支天の神
を祀る所
神代卷
上は利支天
を祀る所
なり

○本所後麻利支天の御神ソビラよりありて弓矢御神など持
つる像として修験者安直アチたるを後に神祇の持とありては右二本残して
介の取持の口先大神宮と号し紀伊國名草郡日茶天照大神と同神と
なり麻利支天の御神ともいひて日の御神ありて一各義集も義集も
あまど紀伊國のとい異之あまの御神を日茶字の岡下に祀ると異と

○本母寺梅若塚のむらうムラウの寺ありてむらうに塚ありてうふちひさ
き祠ありて王権現といふ其例ふ古き柳の朽残りたる株のうふちひさの影に柳あり
常に人稀とそむらうの酒食高農家もころうふあまどの人あけられ
いと梅の葉ありて三月十日の草阪田樂のかかりき今都會ふおと
ぬまをたうと出来て法弁の聲たえ中ふ鄙俗の地とありて古権を失り
○菅系那蒲田村農家の名田畑のめぐり梅の本ありてありて花のびハ
るふ人あればあけけらわぬとて流き葉にあまど酒食ありて
花をむらう好む所の枝を切ぬといふあまの御神をうふちひさの梅は

出産平八
といふ平八
村の梅を
字を記し
を鞠嶋とせり

梅本ありて大木の和申敷を高く家の屋根よりいづれと梅の立て
四河アツマヤよりあふつらり毛むらあて筆硯經冊あど並中ふ風流
を失ひ上カをむらう山の梅の枝サきこたのさあけさぬあつらサ
いひとあまり

○首飾那新梅を花といふ亀戸の梅を花対しむらうを鞠嶋がい
まが小姓を平八といひて時トキはきこたのさあていさう梅本梅は花見がそら
村田並樹後ふま門片園、寛光のまことそらあてまよりふ北平といふ
人あむといひてむらうの梅あどちりての後いさひあ梅の後ふ実を結カス
べは活計の為二百六十株あて一日一株の料ふあそんとはこり北平の
細つらうキチカウきあ後ハ数百株あひ秋まさくおほいそ一家を
おらせり

○ろろ輪泉寺なる義士の墓所ハ門内左の方細道よりふせびて水傍カクハ
小き古井ありて名上野介義英の首を洗ひて水ありて一建礼

あり坂をのぼりゆけを右の方より平地ありて冷光院殿 後野日匠願 長矩朝臣 湯泉
院殿御坊より中庭あり程のかりて横より石壇を上まへ平地ありて義幸の
墓あり今は山坂も平均して道廣くあり 都て様々成り



ハサリ

京傳は古今の一人の幸世人ある不世論色これと和漢の字になれたる人あり非ず切振きや交あり此人の名は後ら手載れる者皆ある

○初摺びの草双紙といふ物よりゆき子伝をうのわめて或は頼光大の心入枕
ち節が猿大雑あど随へぬるは或は物美あめたり又ハ枕の嫁入舌切産姑お
そあどあどけあきおものそありをいさう好書よありてゆき作者つぎ
のあめて近き以て急川春所芝全交あどせたりでらんつをどきばうりセカハ
あうりしを望所理亦別号心東京傳といひて古今の一人して和漢の
字びもつけ推給の人情をうへへたう一通をうて奇く妙くの作者之
その門中より田亭馬琴といふものえ武家の浪人して京傳の門人となり町医に
ありて流澤宗和と名のり後ゆきをとり伊勢屋信左衛門と名をけ終ふ
戯作の名海内の中ありハ今も京傳の恩を後の式亭三馬柳亭種
彦あど皆京傳の糟粕の中ハ古きをあはれ嚙りて通りて香也
づき事ありあり

○懐中鼻紙入ハ天明のころハ多クハ井ドナリといひて古儀抜角あどをかまひのゆく纏ズる
をそ後三徳といひて四羅紗純子あて小菊紙二枚のまゝあて入て中廣くゆひる

を尚せり小菊紙は羽りて入ぐ幅狭くゆき事となるなり

○塚町中村勘三郎一ぶ都徳目と有り又えよりたり昔月町市村ねん為
つび桐長柄と有り又えより有り本徳町赤田勘三つび河原清権を助
どうりて再びえより有り本徳町の村長をまらぬ絶の後再興あり
外三座今も儀事一聖天町の地を給ひてわのりへ移りて東大坂の戲場
三異りて徳巻の宮へ荒事といはれはるり路りて事之具根元ハ終の
徳田江市川村堀城を築と云者いへりて男子をりて是初代團十郎と云
三年八月本徳町の村長をまらぬ曾我五郎時政をりて始て荒事を止めり
上なる剛強勇猛の國風之万葉集に「難が啼東男ハ心向の顧もせぬ當の
る我き軍士とぬきたまひ云く續日本紀にも敵對難に勝て生命を惜
まぬ我を習勇をふるひて必先陣を争ふ云く又宣令も東人の當ふ
りて頻りに答ひ立とも背の答ハ立むといひて君を一心に心く
ちるものども云く市川五代目までハ國風をりて荒事を止めせんとせ

代目して風を乱せり

○尾張町二丁目西側北角より南中程までハ亀巻七五巻表巻第八巻門
と云る早後商人の家ハ二軒ありしをその中より一は九尺五寸あり研
石商人の家ありしを商家より買ひて地を買ひて家を廣くせんと
まうたかの研石屋の土をいまだ商家ともふさたりて廣きを移りて
狭く移りて地を移りて印は廣き地不あまらばり移りて地を商家の
きたる地不我買ふといひて海根邊に研石屋も今はいづれに
知るに飛巻も今の地方もなくありて表巻の残りなり

○我初き以前の繩を好み今も物中だむりハ今の如く不あまら
いなりりき尾張町の赤田小船町の山利徳徳の穴などなりそ後尾張町の
鈴木海世山崎の丈全麻布の物などつきよも来て今も町毎に不せり
海一のいりて増えりいりて天卜を及の美味あらふは徳病を
治し腎精を補ひよめ力を益そ和漢百葉の長なり

○むらりの狂言の奇もみ人のおもしろきもの戯きあれは曲舞戲言の事
 どり奇ふらり事なり。その後別種ありありしよりいひつけ兼用の假
 名も遠いてに在りもさうりぬ事とありての後四郎赤良蜀山人とて
 人情の實事をうらぐちく古今の一人之其門中宿意、阪盛園、鹿津部、
 阪盛園の類も蜀 阪盛園の類も蜀 真顔 狂言 此二人ふざう。師老人の幸意たうして別ふ能楽奇と云名目
 をまきとみん。つるいら。き心得たぐえ能楽奇の真の奇もみ人の
 おふぬれもの戯言の奇もみ人のふざうきあり。びざうけ。や阪盛
 真顔がよめる能楽奇といふまの奇の未熟あり。能楽奇の作意あり。
先の戯作者の料
 のせ。おちりも
 あら。用。さ
 者。手。論。す。ん
 を。さ。あ。不。見。論。
 を。さ。り。あ。う。う。文
 の。及。す。て
 とい。む。
 たり。
 ○お園矢の倉は今は名のもあきとむら。いらふ御倉ありて御矢をさめ
 直給ひ。え福三年の大徳島御倉とあり今も橋の町二丁目中花より
 大坂町三花所村松河お曲りて橋際まてはあり今は少落中なるお倉
 又所がふといあり

柳橋二小ニアルハ夫倉
 表裏門前ナルベケレバ
 夫之倉橋ナルベケンヲ
 夫之柳橋ト云シヲ
 又柳ヲ捷テ柳橋ト称ヘ
 カヘタルナルベシ



小サ
 一丁
 二丁
 三丁

○二代目市川團十郎が日記の老の楽といふ随筆の中我初年の以始て
 素を見つる付鳥羽三葉の三片に紋の單物振袖をさきて有るを英

一蝶よりいふをたのむを晋其用ふむく日本地を以て事今も
をよの二文の世を名をひびくせしむと今はなき人の我の幸よ世ふありて名も
又願ふやのそりそりそあり是正徳享保元文寛保の同多きく我如き
頃へは編緋緋二重ありとの単物若く事武家一統の常之今ハ緋入給ふあ
まど単物ありたるゆゑ田舎民が志まば三枚ふありて地幸よりしりと
幾事とあり時代ありのちひ神代ありと

○むろい谷中ノ感徳寺二箇中道寺碑文谷法華寺四谷自澄寺五結谷寂
光寺の五箇寺とも邪義ふよりて元禄四年四月廿八日谷遠流しをせしむ五ヶ寺
大天台ノ改宗一上野ノ配中とありりさるをそ五ヶ寺の内感徳寺の
御朱印と富ノ鳥羽ありるものとと取ととさんと取ひしを寺をばゆり
結谷寺号のそり給ひし感徳寺を六ヶ寺と改め給りさるる前
のそり地不を給ひしをば新ノ感徳寺造営して莊嚴の塔構言路道形
よりしを程もあいまこ心門也来ごる極ノ破部をくま

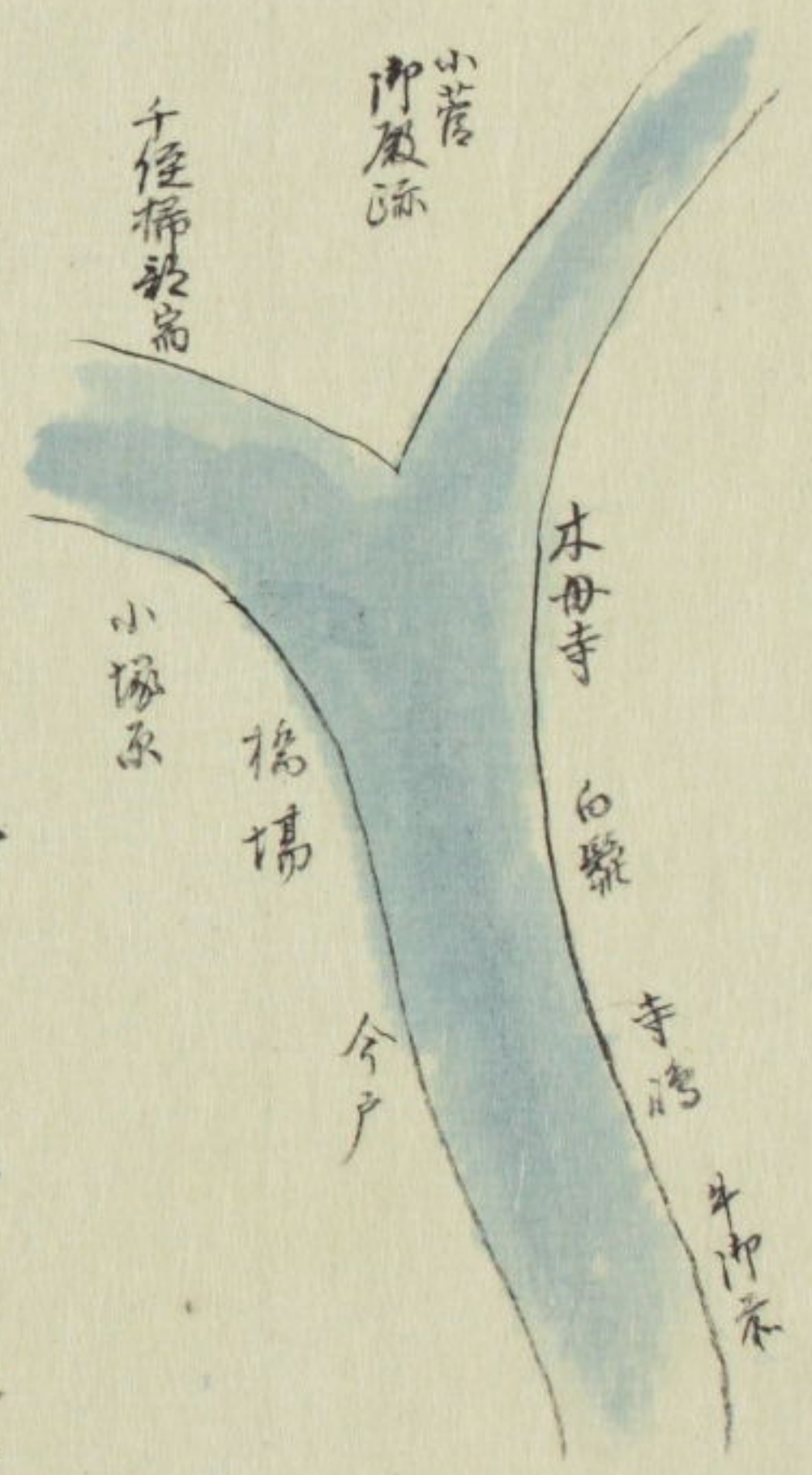
神代此たのむ 中巻

赤藤彦磨

年月此未経のまよりキハ 物啓のうらひり変はしづくの雅が志い
づるこあともあくあもかこもあつうなるいきほひま女
あつうりそとむむクニきりよはあつんともクニ奇クニ妙クニある神代の
なありぞり

○小菅コサゲ 津敷福ハ今は百姓地となりて津代官支配所となりて田畑のそ
あり構の月一筋の川ありて兩岸ノ橋ありて極くそり左の花のた
みめもあると聞ゆて見ふゆ人も稀ありあり後ハ盤索花の地とや
ありなまき 隅田川と綾瀬川と落合ふ所ありむむハ屋敷とむて
海をのこりしやありつらん万葉集の東奇アサヒ古頃コサゲ京呂ロノ乃半良布久
可是能安騰カゼノアヤド酒香カサシヤ奇奈コナ古呂コロ平ヒラ於毛オモ比須ヒス吾ガ乃ノ半良布久
をば吹えぶり 小菅の浦吹風の何とせハ愛り 思オモ妹を思ひさるんとそ

浦といひしつておろりあり思ひやう
 ○東海についでに百万葉集の以此東海不
 解不逢不立などをばけり
 あいありありありあり今時とけけ
 又寄よ麻よ附よたよどいづきを
 集のほも今も同し事あり何と
 なせといひ



○日づしの里いとはいづりといひて新堀の字をかろり永禄二年北條家分

水鏡
 小菅
 中庭

限帳ニヒホリノサト新堀里遠心跡九節知りあり後いはいほりを入声よはつありとい
 いしふふ元禄三年繪巻よ大傍カ候少二ツホリとあり寛延年中の江戸名不
 繪圖巻十四ふ始て字を改めて日暮里ニツホリとありと程ほりといふ
 きほりといひて日暮里の刻ありていづしといひて上野ニヒホリ園新
 田ニヒホリにいたありを和名抄のい青使ふにたといひしを今は入声い
 につたといひて同日の終あり

○天明三年七月我十六年の改江戸中家々の居跡子言き二天つきりて
 灰砂よりいふい事ありありと人々いふありありといふありありと
 信濃園ニヒホリ園の疏矣ニヒホリ桐硝の末茶して山焼とあり万座ニヒホリ心ニヒホリを利根川
 一沈水吹也ニヒホリ大巖ニヒホリ小石巻く軽石とありおる人馬おびたぐりて亡びりて
 時の石をよそ末つる人ありて見えしは江戸の系石ニヒホリ増き事終の如く
 ありしころ弘化四年三月同園ニヒホリの焼くも有るを言もなり灰砂
 もろくさきと信濃城後のお列の希代の大地を城廓神社寺院

氏を悉くゆり居り心を平地を川を圖となり人馬の亡ひる事天の
日は數百倍と思ふ天明の次はよき事一てびハ横ふ去中を費き事
もあふて一同心焼く事も天明と今年といふ事異にそは十六軍の壯
士今八十の歳とすも女今のうらひつてより或も大地震を
心を低く平地をさう〜或ハ洪水を川を圖〜野を池とする
あとのくま〜あ〜神の業の〜中不業〜人力の及らぬ事
申すも伊豆國之橋の怪古名所の神の事〜ツツ給へり

日本書紀天武天皇十二年十月己卯朔壬辰速干人定大地震舉國男
女叫唱不知東西則山崩河涌諸國郡官舎及百姓倉屋寺塔神社破壊
之類不可勝數由是人民及六畜多死傷之時伊豫温泉没而不出土左
國田苑五十餘万頃没為海古老曰若是地動未曾有也是又有鳴聲
如鼓聞于東方有以曰伊豆嶋西北二面自然增益三百餘丈更為一
嶋則如鼓音者神造是嶋響音也ま〜續日本紀孝謙天皇天平字

十二月西方有雷似雷非雷時大隅薩摩西國々煉煙雲晦冥去七日後乃天晴按鹿兒嶋倍而村々海砂自聚化成三嶋炎
氣露見有治鑄為形勢相連皇似西の屋為嶋被埋者民家六十人余云々

八年少も薩摩大隅の界は三嶋涌出〜皇祚稱徳天皇神獲二年も大隅
新島出来り日本後紀淳和天皇天長九年も伊豆三橋の怪古名所の
奇〜タハ〜あ〜神の御ち〜の遠國ま〜事
か〜の如〜又古今の大奇事あり 光孝天皇の御代仁和三平丁
未七月二十日大地震あり〜仁壽殿紫宸殿大茂省弦司舎屋等悉く崩
天皇オカニハ大庭をたせ給ひ〜杖束略記あり持津國越に強〜しと
ありその時信濃國大庭類於巨河溢流六郡城廬拂地漂流牛馬男女
流死成ス五とあり丁未歳といひ信濃國六郡といひ今今〜今年の地震の
災サヒと同〜きもあ〜き事〜
○叙爵ありし御方從四位下ウラ給ふを今今口口と稱して親撰〜
給へり侍從を兼給ふをコトサ親撰〜給へり少將を兼給ふた
をわ〜ぬ事〜さ〜と左右近衛が將ハ相當正五位下〜侍從ハ相當從
五位下ウラは從四位下〜は從四位下〜

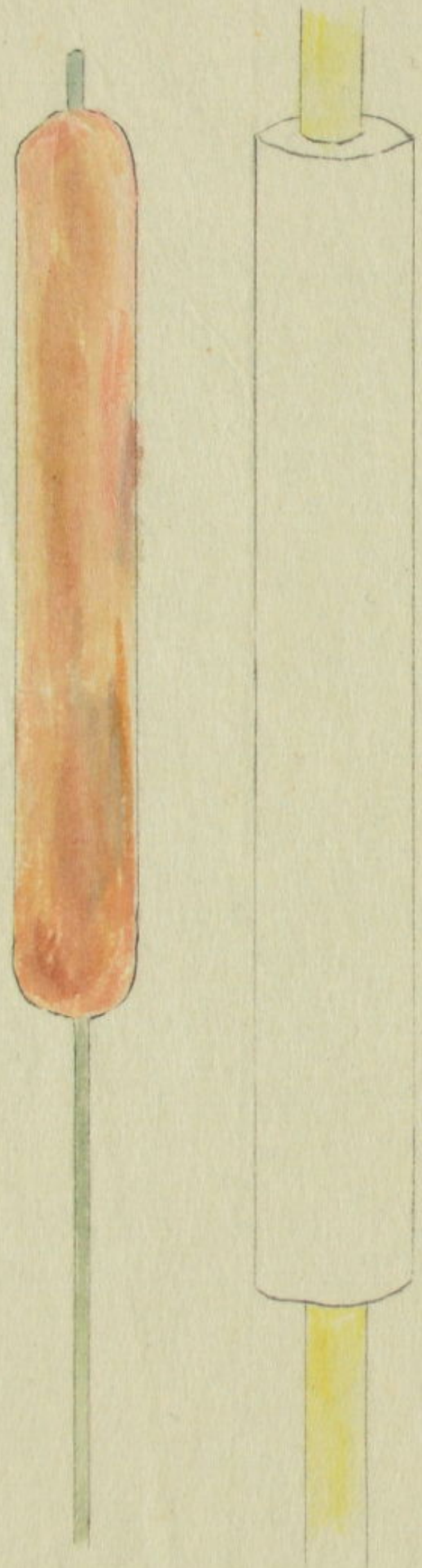
さういふ位階よりも官職重うなるといふありしありんを五位少
 侍候はる家流にあまど五位少将ありし昔を五位中將もありしあり
 宇多天皇の御代は源、清、醍醐天皇の御代は藤原、兼、後など五位少
 中將とありしは官職秘抄は執柄、息、兼、五位少将、藤原抄は五位、時、任
 せ執柄、息、外、不可然ルニ云ク

いりく郡縣の位は位田あり四品六十四少現米千石正四位二十四丁と
 六百石後四位二十丁とて五百石は法光とありては和名定まると位田あり
 左少後四位十を四品と称するといふありし也

○武家の中男を今を中男といふがあらうとあると堂にありし
 侍と中男のちふ中男といふあり布衣冠は若黨中男の上中男を石
 具すとありしは執柄帽子は小笠原にて並衣は帷をくくは袴は又口を
 うらしてあまが中男を中男の事あり又中男を俗におあて
 お脚といふ事とこと一人のあてむり衣冠は兼、後、中男の中男赤
 坂を後后のお脚といふ者稀ある容顏は兼、後、とせめせらるる
 お脚も赤坂奴ともいひてとてとせらるるが今は通稱ありしと

○蒲鉾といふ物を今も竹輪といひて板に附たるものを蒲鉾といふ
 却脚を失ひしは稱え今も竹輪といふがむうの蒲鉾といふは
 蒲の穂ふゆらるる也

二寸長



○蒲焼もむうの鱧の口より尾のち中串を通して丸焼なりたる事
 今のいふかしのちあるの魚田樂のやくりたる事一歩及べり今もさ
 たぐひは田舎のちある事一歩及べり大い戸をい早くより天下不双の
 美味とありしは氷とある事一歩及べりたるの鱧也未だ大和會は徳也

二寸五分
 小串
 大串

當世の蒲焼



蒲の花



いすくのかわき

網理人群居すも一夫四海ふ比類あるべうに我々七輩のひより好
 喰て八十勅をももを病なるとこの靈薬の功證よそ多根本皮のみふ
 所ふわらびさきをかむし蒲焼といひし魚のひより尾まて小串を
 考ふて焼くもが蒲の穂の如く焼くもたふそけいそ之當世の蒲の穂
 の如もつるに程の袖ふ如り

お日の大火にて死亡の人十了七千餘人よるべりさるる

公の命よりして四向院草創ありき、増上寺二十三世森蓮社遵誓
貴居士人中二世中興樂蓮社信誓上人自心貞存和尚之傳を宗して八宗
兼學のありしはあの人佛像彫刻の妙もして弥陀釈迦大日の三佛堂を
建らしめて萬治年中之町奉新しく刑死の者又牢死の者とものため
御情愍之ゆゑなふ八宗兼學といふあり

○むうの兩國橋大橋永代橋を三六橋といひてを安永三年漢草大川橋
出来しより四六橋といひてを申すもあま橋のこゝに善精寺ありて三橋の飯橋
ありてあまの橋飯山庵ありて性主人武家の介の孫武文の孫を文化
四年九月深川八幡多礼のゆゑ橋を修して千餘人溺死せしより四橋皆く
善信とありて武家の介も橋を及ぶが永代橋の橋より白の我も橋を
いふらんといふもどあまのふこもあひてそりこりれば橋のこゝに
あまの人の多しよりて舟をうりて川のすままでゆくは

あまの人の水の中を流すを見れば目くらまの胸先をうりて身も
くらまのきりきりえうとさうとせり黒川の清は我より先橋の
すまをさしりておぼも死すりと後ふきといふはあまの事
あひくさすもほとほとあまの事

○正月五月九月の年と長月といひて佛説あれむうの寺院のこゝ
用ひて慈神社の用事事をいふとあまの事を今はあまの神社と
用ふは活計の爲の事と神意とを憚るべき事を知らぬうのけ神を
ど多くりたる長一藤一経ふ若右の善男女等修る年々亦戒忽脱諸
難等ヲ獲殊勝福利云々又云天帝以正月九月九月巡向南別註
記衆生作業云々後耶代醉編釈氏智度論云々廿月所謂正照南瞻
部州唐人以此不行死刑云々

○むうの男女の婚嫁養子の縁候を介奉公人の縁候をを要
といひてあまの事ありし事今も同じ事なり

今は多く、この男中女の口入の事、その事、縁結富術の者の
不結ひの事、この口入の事、医師の事、この事、寛文
九年、本控所を、町医大和堂安といふ者、同志の謀計を、あり、この
事、伊達三郎、長谷川助右衛門、とあり、酒井家の、お息女の
縁結ひ、持来、又、おの目、二、お、二人、て、か、す、の、死、を、せん、と
ま、り、一、小、露、頭、と、な、び、同、年、九、月、廿、四、日、あ、り、追、殺、お、お、を
い、り、安、安、とい、つ、要、名、い、り、高、人、の、事、お、死、り、て、申、い、る、医、師、の
方、お、の、ら、ぬ、も、あ、り、

○浮世繪師といふ、美川師宣、い、つ、も、さ、う、さ、う、後、も、右、法、長、勝、川、春、章
ま、り、其、門、中、も、今、の、世、の、風、俗、遊、女、戯、場、の、俳、優、人、相、撲、人、あ、り、その
者、を、見、る、う、め、く、よ、く、か、さ、たり、近、き、た、い、豊、國、が、門、中、あ、り、團、圓、い、つ、ま、り、
か、り、又、その、門、中、並、び、門、中、な、り、ぬ、画、づ、く、の、世、に、か、き、さ、を、見、れ、ば、
男、女、と、も、お、肩、を、さ、り、の、肘、を、膚、つ、け、さ、る、ぬ、あ、り、さ、げ、い、ち、づ、く、

り、た、り、姿、お、か、け、さ、り、い、つ、あ、り、た、あ、り、ん、時、世、の、さ、あ、り、い、い、わ、づ、く、い、ち、
げ、お、見、ゆ、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、
程、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、

○安永天明の、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
の、編、綴、と、い、つ、お、を、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、
さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、
い、つ、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、
家、繪、師、あ、り、後、い、つ、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
は、い、つ、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
い、つ、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、

披風

小直衣の上帯をき
風を披ふ云



披風の形を
度合相へ

○むらゝの使者どもいそぐに異物ありとてつゝを挫ぎし
まきを助け金銀を借すは腰の糸籠ぶらおを上げて金百両入
て道徳よくお買つて一おふたつとて價に二あつて一おふたつとて
あつて一お買つて一おふたつとて價に二あつて一おふたつとて

威光をかり富祐もおも福りて金銀をもちて男をく顔をまらうを
自慢と云むしといふうらみのあつひあり

尾張の内門人小林
仲弘の我学友と云
家の先祖の中へ使
客者く持てて益今
程迷まり



桐白木

紋墨

○天明の次正月えり菟賣扇賣といふ者ありきしを次中も絶くた
御城のそありきしをそもけしし絶て今を寶船賣双六扇箱買

のこ多くありたり昔はをぎを買て蓬菜湯の候に之を今の生糸をばけり
葩黃の字彙は糠米爆米白糖經験方小福兼後爆火食謂之白糖米亦
花米爆米等の字をもり表仲希待集は爆糲穀於中一名字彙とも
手抄る果
花米をばけり
花米をばけり
花米をばけり
花米をばけり
花米をばけり

○安永天明の頃の泥鳅を喰ふ人稀にむらぬのりやき人の中からわけて喰ふ
人あまざとれすう人稀にいじりて喰ふは身の穢のを喰ふと云ふ一き人
いさういさう人あまざとれすうけしをばけりしをばけりしを喰ふ人あま
ざとれすう富術の食料とありて價も高きありしより近きありの川より
かもうこもあまざ見えしを今の細く見えし事を今に著のわとの
あり中草個自性冷多食當他或は水病とあまざと介戎の泥鳅の異あま
天保二年武井周作が著したる魚體より中平毒あり中を温の氣を並に
ぬを補ひ瘧をのがる白飯を生むに鮫魚の法を述べて百毒ふ
我々の川
地味もいふ
地味もいふ
地味もいふ
地味もいふ
地味もいふ

○明和安永の頃の猪鹿の類を喰ふ人稀にむらぬのりやき人もいそひて喰
いていそひて喰ふもいそひて喰ふもいそひて喰ふもいそひて喰ふもい
かばけりし事をとありて今の自邊よりいそひて喰ふもいそひて喰ふも
いそひて喰ふもいそひて喰ふもいそひて喰ふもいそひて喰ふもいそひ
いそひて喰ふもいそひて喰ふもいそひて喰ふもいそひて喰ふもいそひ
事古事紀書紀もあり神あま鹿鹿を喰ふ事
痛ふ及びの事ありて今神の忌に喰ふの神は別當といふ者もあ
ふるは別當の法師ありていそひて喰ふもいそひて喰ふもいそひて喰
せう人をいそひて喰ふもいそひて喰ふもいそひて喰ふもいそひて喰
禁例といふり五畜といふより食料ありてを外戒の悪風あるは
かき初定ありしは以外の猪鹿の類を喰ふことありていそひて喰ふも
者嫌天皇紀より猪鹿を喰ふ類も永不得進所とありて佛を信じて喰ふ御世
たのせむ

○むらゝの武士遠業遠見などふ野袴踏進なりしを安永天明の頃の

一段不
其別



菅笠
お羽織
馬宗袴
安永天明
の尻の風
むうーの風

編笠馬宗袴ありその後丸羽織ハツチ裾もーおたろが今も投げまへん
浅き巾皮笠亦ハツチ細笠とありて深編笠のたろく賣上者に見ゆ
のそあり昔の遠足道と今のそれ同く我をたろくを後のやくもどなり



○安永天明の尻と裾と戯場の者近も職業のあざりたろく尻尾と菊五郎と
しつろが忠臣蔵の大星由良と即の役ろそ刀のありて金七十あるりゆりし

天明未ゆり
寛政始ゆり
の尻
竹笠
巾の織
むすち
當世と
竹笠
お
お織



いふも昔に
ゆきおが来のやく

或年銀出でて小判金一匁金南條四文銀少残あり居
りしを文政元年或令出年同七年一匁金出年同十年一匁銀出年
一匁金出年天保三年或金出年同九年一匁銀出年て今小判一匁金一匁
金一匁銀通用四文銀少残いそのまゝ也天保の當百匁も出年しり
○むうの官服の文をとりし物師澤物師いさゝかり志しつゝもねを事
ありしを文政の末の辰より藤田系系霞八友立涌川標雲鳥たごし
たりもなる^{ユカテテ}浴衣も杖あじふ保めふおちあ^{眞氣}く借とある事とも
か^{シツワナシ}掃帚^{シツワナシ}盆木の唐もも見ゆ思ふべき事あらずや時代のうつろひと
いひあ^{シツワナシ}じ^{シツワナシ}と^{シツワナシ}わ^{シツワナシ}ぬ^{シツワナシ}事と
○も^{シツワナシ}残とも女他人の面を^{シツワナシ}を^{シツワナシ}を^{シツワナシ}を^{シツワナシ}都も鄙も被^{カツヤ}衣^{カツヤ}も
あり系^{シツワナシ}部^{シツワナシ}の^{シツワナシ}今^{シツワナシ}も^{シツワナシ}所^{シツワナシ}の^{シツワナシ}残^{シツワナシ}き^{シツワナシ}妻^{シツワナシ}と^{シツワナシ}麻^{シツワナシ}本^{シツワナシ}綿^{シツワナシ}なる^{シツワナシ}の^{シツワナシ}被^{シツワナシ}衣^{シツワナシ}も^{シツワナシ}より^{シツワナシ}大^{シツワナシ}に^{シツワナシ}戸^{シツワナシ}も
若^{シツワナシ}し^{シツワナシ}の^{シツワナシ}あ^{シツワナシ}じ^{シツワナシ}と^{シツワナシ}若^{シツワナシ}り^{シツワナシ}し^{シツワナシ}を^{シツワナシ}浪^{シツワナシ}士^{シツワナシ}と^{シツワナシ}若^{シツワナシ}同^{シツワナシ}八^{シツワナシ}三^{シツワナシ}席^{シツワナシ}とい^{シツワナシ}ふ^{シツワナシ}者^{シツワナシ}被^{シツワナシ}衣^{シツワナシ}を^{シツワナシ}着^{シツワナシ}て^{シツワナシ}女^{シツワナシ}
海^{シツワナシ}と^{シツワナシ}成^{シツワナシ}て^{シツワナシ}松^{シツワナシ}平^{シツワナシ}豆^{シツワナシ}列^{シツワナシ}侯^{シツワナシ}を^{シツワナシ}う^{シツワナシ}ら^{シツワナシ}い^{シツワナシ}し^{シツワナシ}事^{シツワナシ}露^{シツワナシ}頭^{シツワナシ}ふ^{シツワナシ}る^{シツワナシ}び^{シツワナシ}八^{シツワナシ}三^{シツワナシ}席^{シツワナシ}の^{シツワナシ}残^{シツワナシ}を

一寸半
位

て江戸中 被衣 御儀止とあきり 京都 兼よ 田舎 今ふり びの 女 近
登^{カギ}摺^{カギ}長^{カギ}き^{カギ}一^{カギ}尺^{カギ}二^{カギ}三^{カギ}寸^{カギ}も^{カギ}あり^{カギ}江戸^{カギ}め^{カギ}て^{カギ}ハ^{カギ}と^{カギ}短^{カギ}く^{カギ}たり^{カギ}て^{カギ}當^{カギ}世^{カギ}ハ^{カギ}丑^{カギ}す^{カギ}ざ^{カギ}り^{カギ}
少^{カギ}なり^{カギ}たり^{カギ}被^{カギ}衣^{カギ}を^{カギ}着^{カギ}る^{カギ}時^{カギ}ハ^{カギ}掃^{カギ}枝^{カギ}長^{カギ}き^{カギ}か^{カギ}り^{カギ}



○昔一なるをさすく遊来世と一統ありしに庚申日ある月かきたる
 山兜の男女ともふ合篇ありて字の名を附す事とありしに庚申の合
 る名にありてふさきと甲乙丙丁戊己壬癸とありし月かきたる
 小本篇大篇と合篇に水あどの字を附すもあつても合篇の用も
 うきても事と九一年十二箇月の中は庚申日ある月の十月かきたる
 の月五百人合篇の字を附すべきをなるといふ俗説もあつても
 んもまごあつても

○昔一ありて今なる事一年申の霊祭と一年ふさきの申と事と十月晦
 の日縁ともよ世のありつひの縁をけむあとのぼりともあつても
 花集後拾遺集あどの齊も法外記言の枕草子もあり亦もこと
 後よりいりて善法師の流慈もあつてもあり報恩経も霊本日十月十五日
 寅時未次日午時辰九月十五日卯時未次日己時辰七月十日卯時未次日十六日午時
 辰八月十五日辰時未次日申時辰九月十六日未時未次日申時辰十月晦日午時未

二月朔日卯時辰これあ日と事と祀ひ法と事とあつても
 あつても

○百日如まの帕瘁たますと世微たますと倍ふ様すつりとの事ありけ
 幹をあらつたりなるのつうふて大樹とつくともあつてもを
 赤とも思怖本とも思怖本とも思怖本とも思怖本とも思怖本とも思怖本とも
 蘭花よりコロイドシールルルシートと事と事と事と事と事と事と事と事と事と事と
 多なる事如生莫觸と事と事と事と事と事と事と事と事と事と事と事と事と事と事と事と事と
 めんばあつてもあつてもあつてもあつてもあつてもあつてもあつてもあつてもあつてもあつても
 ことと事とのやくのあつてもあつてもあつてもあつてもあつてもあつてもあつてもあつてもあつても
 いそまわし極本商人のオジギも事ともビックリも事ともいりしあつてもあつてもあつてもあつても
 程いと事と
 ありたる事と

二寸五分



○婦女小児のまかり小唄はむうも今もうらやま事ありて七言七言七言五言の四句
たをま事ありてむう時ふりて三句も五句も多し七言事ありて五言
の七言を二句並ふ加へたり亦二三句つづけて如くぬらうしむりて五言
七言の格にあやう事ありて一言たりぬらう事ありて一言ありぬらう事あり
をゆりて五言と七言をまじりて七言の流しを七言の神代にならうり
ありて戒の侍を五言絶句七言律をまじりて七言の流しを七言の流しを

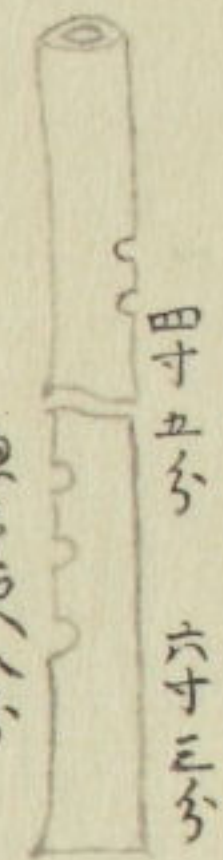
絶句七言律ありて七言一文字一文字ありても二言なりともありてや他皇朝
の音聲正しきこと如戒の蒙撰する言律と事一かゝるは異なりて

○むう一尺八分の笛うへんうらやまかゝるも有りしをばむうとたえて
大尺八のうへん今もむうありて一月寺鈴法寺などいへん本寺せ
来て僧の職業ともありて性古いさる者ありて樂意之源氏末摘花
大筆筆尺八の笛杯の大聲を吹あげばむうとありあまいあゝの尺八
あて長三尺八分中より一尺ありて一尺切るといふこの笛を家知事以中
心色の年充つる人よく吹くもむう門人もうへりありしを今も絶て
きことありてむう一尺八分の使客雁が音文七といふ者尺八のあまを
世ふ光でらむ一尺八分の使客どもとれを學びたりしが後く吹くこと
さし通してむうの爲の用より人としてさき竹を長三尺八寸ありて長
多くして短笛の名も一尺八分の福もあつり今のか寺の職とありし

あの喧嘩道具の尺八之

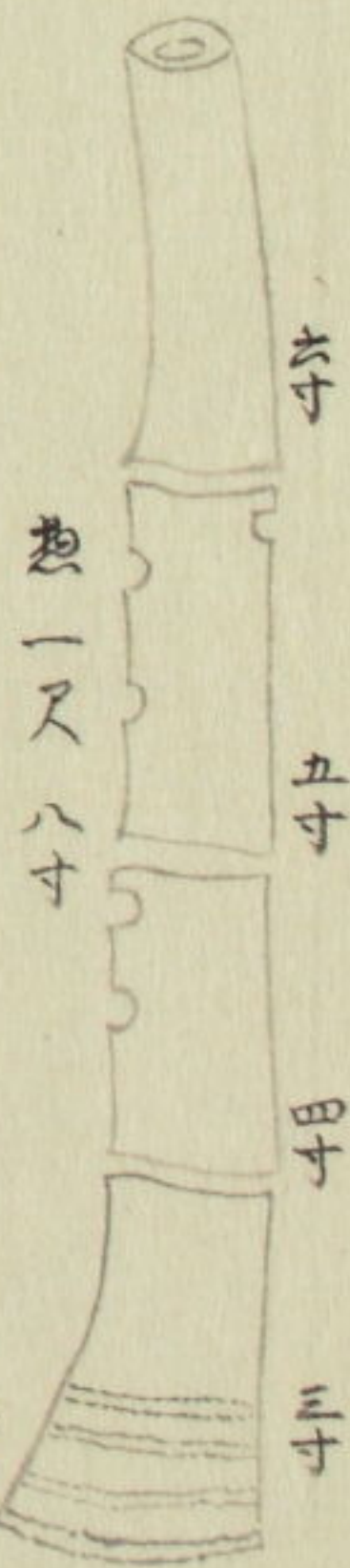
樂器尺八笛

一名短笛
一名一音切



後世を尺八笛

純粋器亦喧嘩笛之



根を
開く

大いなり
二十寸位

○大神君数度の御合戦に必死の御危難をのぐも給ひし事十八度ありし左
小園東より十八ヶ院の檀林を造営し給ひし中ふ上野園新田郡大光院の境内
小新田大炊助義重朝臣の御墓下の松の切株おのづから一葉の葵の如し
亦勝願寺境内

八幡



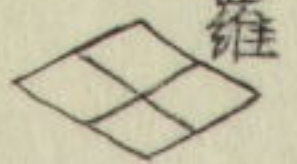
大神君の御神木杉の切株も一葉の葵の如し
御先祖の御田なるを八幡太師義家朝臣の御合戦より加茂次郎義綱より

加茂



傳りてありし

新羅

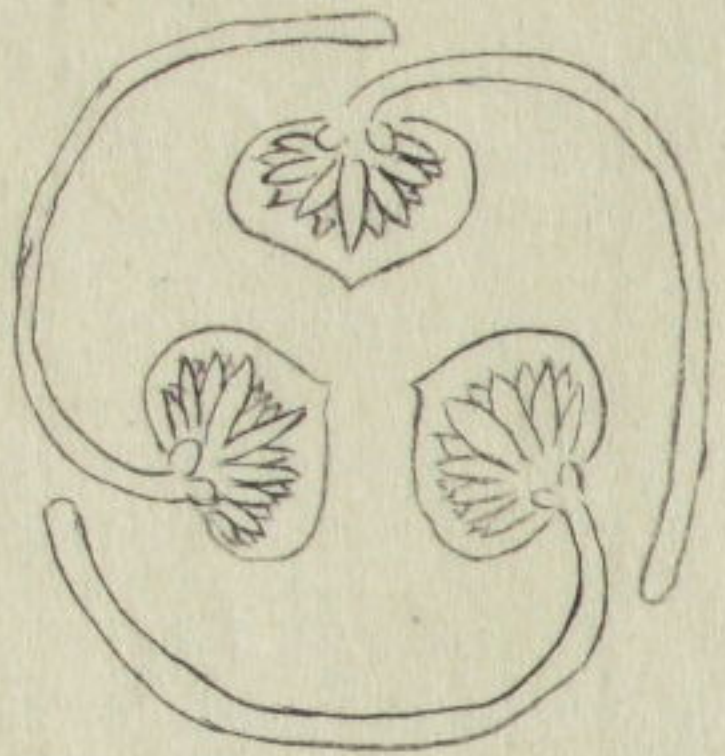


大神君の御家に傳りし葵の如し太師義家朝臣八幡の切株より元服有て巴
の文之次郎義綱の加茂より元服ありし葵の文之三郎義光の新羅明神
元服ありし葵の文之これ新羅明神御田源氏とも甲列源氏ともいふ所の由切りし
時の切を紙に描く大光院より勝願寺よりも葵の文の後継りしもの由切りし
多りこの園加茂郡より親氏君加茂朝臣と稱し給ひ巴と葵と合せて葵
巴を文と給り其より徳川世紀を長十六年三月の條よりありし

別分

葵巴
大光院
勝願寺
神代除波中巻終

葵巴
大光院
勝願寺
神代除波中巻終



大光院
松



勝願寺
杉

横文除
壁尺五寸六寸



幹中
不朽

神代紀前あり十巻

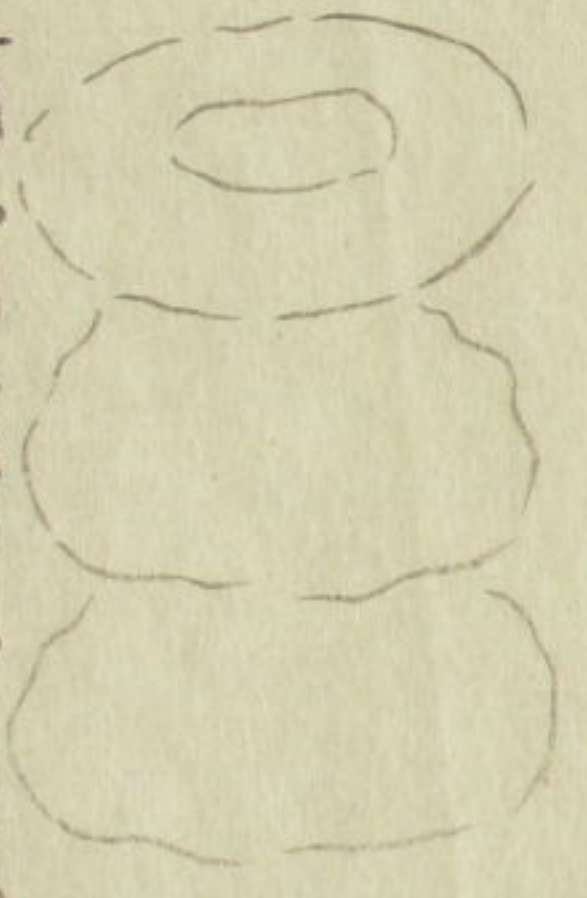
赤友 彦 麻呂

目より入り耳より入る事ある心よあまらねば経を説くを人種
 のききしてげふはる事もありしあど思ひうらまふとあまらねば
 おぼしき事ありしこと思ひ出さぬがまらねば性
 のゆるあまらんとぞおぼし

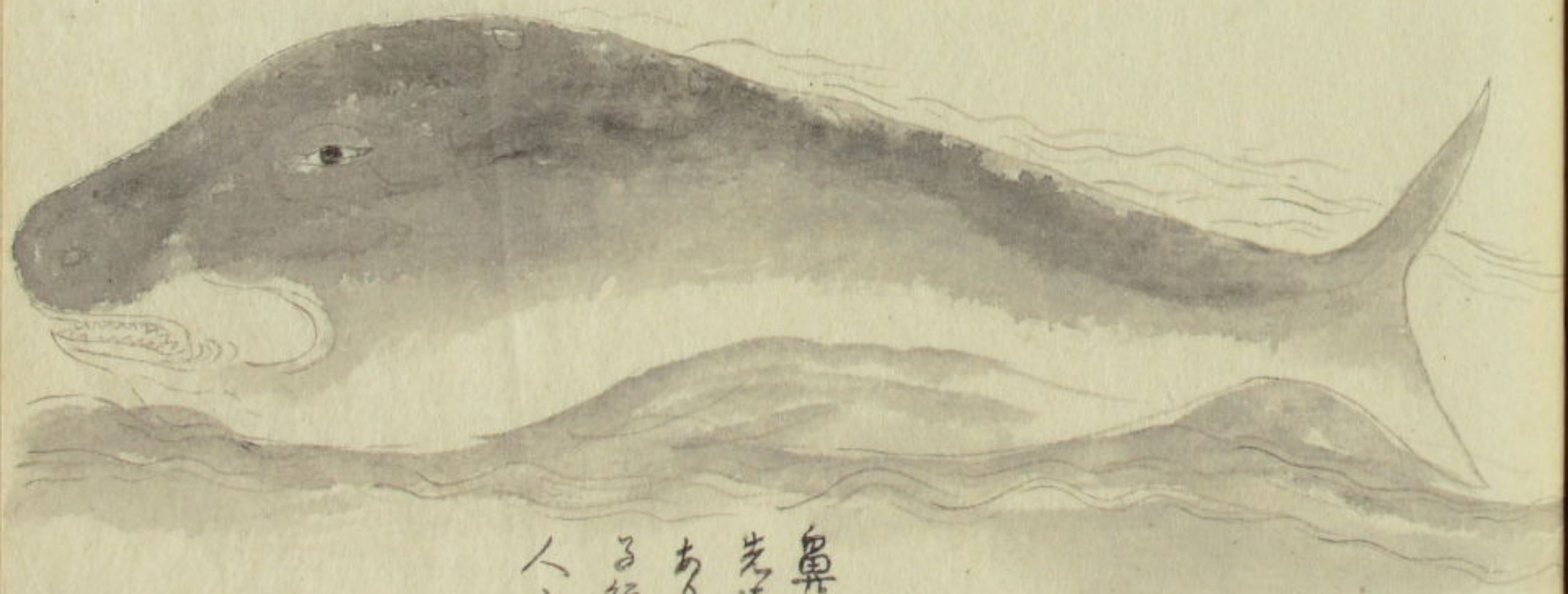
○寛政十一年品川一縣よりし事ありことごとく見えたりふ品川
 洲邊海岸より十回をあり致きて徳は有長十回よりあり
 あらん北背ふ吹穴三ありその後亦以て見えふ悉く切
 桶ふ入て持運ぶさる各油とあるのこみり食料なるを
 ありの前の胸骨の切らる如くあり皆氷師の事あり
 をん

二寸五分
 ハト

任を
 まらねば
 あらん



その後文政三年三月品川一縣よりあり
 天保三年上総船橋一縣よりあり是ら序のありあり



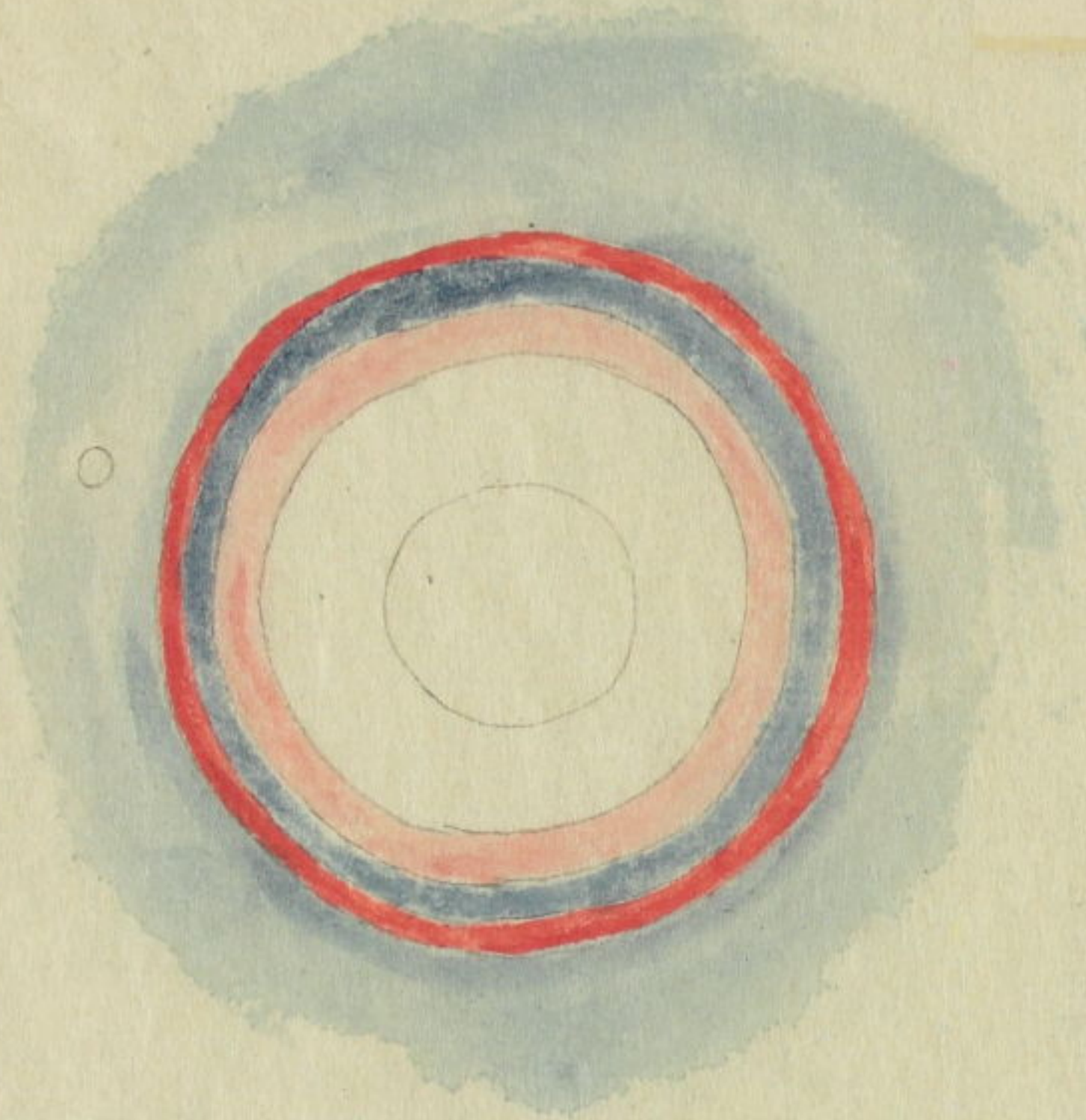
鼻より尾の
 先近十二間
 ありいま
 り縁を
 人より

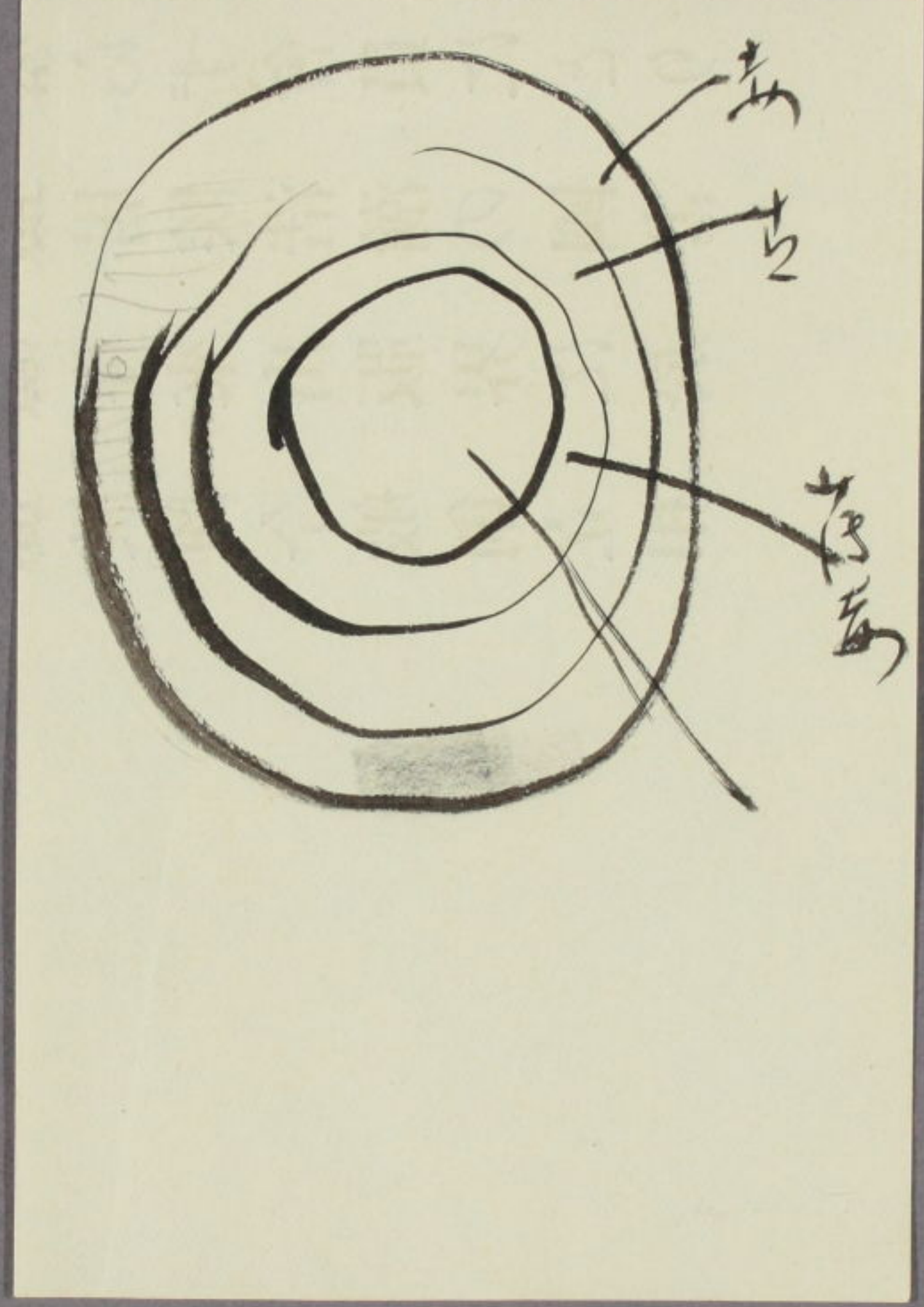
○心主社はもと入同郡川城仙波ふありしを文明の現今の
 御城月御葉ののをさうのさきを後延徳年中今のまは御門の介
 奥塚へらのさきより今のえのまを後兼徳の以永田馬場の今の社地
 小移されり

○神田明神社を今の 御城月神田橋田のむら 芝餅村といひて天
 平二年の銘をみて多神の素盞鳴神大己貴神二神を將門の
 霊を多りたりといひて遊之將門の天慶三年官軍の先代を以て其
 霊魂のむらびて人民を悩まを延文の以真教坊といひて將門の霊を
 多り御社より百歩隔て小社を造営せり是將門の霊社あり真教坊
 の小社の傍より多敷を以て芝餅道場と号し元和二年御社今
 の社地よりされ芝餅道場の當時後多あり神田山日輪寺といひ
 ○天保三年八月十六日夜戌時をり月暈あり又色ふ粉たる如く月の
 右に一星あり和名抄より暈氣鏡日月之加佐月浣之内漢書高帝

七年月暈圍冬三畢七上星を云畢昂間天街之街小街南中國後景有
 平城之圍七日日暈乃解とあり其の夜に四重の圍を

引ハリニ
 色中示入





○天明のころ筑き神明町村松を席を備えし人の家小はくふおふ
大なる東浦^{カニ}寒丸^ヤを正中よりふあつて割る中は大なる蛇ありて
すくふ斬もくもを目初れ見多り是を思ふむうし御堂園白道基
おあよこより流ひし大和園より丸をきりしを待たぬし所於時
医師室雅僧勤修三人傍小居る中より時明曰くこの丸は毒あり
輒咬破べうしんとの曰くああこの丸中しむ毒ありし時室雅一針をりて
呪を誦するふ丸の中より一丸飛出て騰躍して時室雅一針をりて
丸をきりしを勤き而すむ割て見て見もば中ふ毒ありてお眼針を
貫^{ツツカ}も多り三人の家々の業術ふ妙を好する事世の英談とせり是
れくもあはぬしを志するは丸の中ふ小蛇入るる實も蛇も
はきくは大ききありしなりん

○享和元年師翁宣長大人京よのかりに條の旅宿めて儀釋せ
らむしふ公に敏上人あまゝ入来種師の流る中よききと氣山

新三位貞直の傑く流るる少や師翁國よりくく時のはをあむけの
は條京家より稀ある古個の長弁之に條會記にあむる家あり略^テ今
の城平安の京以来堂よりみらん始てあり古今集の伐の撰集の空
か一かくも奴の名弁の集りあむと長弁のま^拙族^ヒあむ貫
る躬恒杯の大人あむのふとも思ふもぬをぬを来契沖長流とい
ども長弁のいまむけりしを志し流るる古れ風調にまゝなり

○いみしき事あてを来のあむりしとありしに長弁を官より以下り
よいしはどの字は何右衛門何左衛門何右衛門何左衛門を進擧と
号^{ナツ}ありと官名あるを勅許あてていむりふれをくぬ事あるを
を来のあむりしとあむる今もあむるもあむるも亦たのまの左衛門長一學
平學教舟馬要人伊織あむりしを相馬將門かまゝ東百官といひ
て少民の憐れもねえ將門の天位ふのかりたる心あてむり親皇と名
のり左右の大后以下文武の百官ををくし歴代士のまゝなり

古事類考あり東百巻といふあり事之松尾神皇小輕母と云う著
園集にあつた実名の頼母ヨシトモして俗の字の頼母ヨシトモありあり

○寛政元年秋拾貳歳の時元帝合百番の僧一志々僧皇の安國
躬強石川恒之左方十人右方十人あいまさ秋野彦吉源智
明といひしはりておろし加まり判者の後口位下甲斐權守加茂
香子齋縣を之を前合一卷十年昔一の火の災の時ふせしをこと
商人のふりてりしはりしき事これらもその判者香
齋あがぬし僧主躬強恒之をさうの左方十人皆つら右方十人
一人のりて九人皆つせりて後一卷を見てその時の事と思ふに
たゞ是れふとあつたなり

○寛政の始の次第合戦のあり見たり介戒漢武帝が元興元年
秋つりしよし事文後集よりあり 皇紀にも神護天皇二年
秋と延暦三年夏とありしよし 續日記よりあり

そ言ふの思ひしを七月の次第地をさより大名山と云ふなり
出乃小野子橋の西の東あり陸五六いさうひぬををめつしと見え性
の人も百人之留り見居るなりつら集り事ぬらんはきくも物
起るなりてつがはありあや群きていさふぬよのつねありて武具
あつたるいさひいとまごう見ゆわらむと田舎を去り松坂右松
坂武右馬の杯と云ふなり人として来りたり見居りたりはり性
敬ゆらかの若利礼をたてたうひて死すもあひしとも思ふに昔
おあがくありし川をのさむりよ入てゆかちをびりたりなる見
心田吉沢松坂も死すなり今もその心田吉沢の吉沢南吉馬松坂右の代
とありなりあやつり跡りしき思ひ出せうらつらきなまを同く時
あり見し性某の人の申しあやめ今もあつておのれあり思ひ出せ
うつりさうす事ありあり

○辰虫氣樓といふ漢籍ありて大陰の氣ありといふこといふ
本草五雜俎文苑彙編鳥 イキ 介蟲蛟之属

岸を文化九年の秋魚釣ふ人として細波佐吉神社の神を平島
 日向好弘因舎人助好祖ハ父子た小門人あまは佐ふおはまて船のりて
 東の浦せりて海づり一面ふ骨之海りておもき先だの舟とも見えぬ
 だよりたまたたの舟あめととゆふは骨は映じて又色ふ粉くもがくたま中
 さいのりき宮殿梅園あらしをさうり人々あまやとおどろきとほふおひ
 夜中あまをどあまよてあまの船に見えぬ船人の云くこの船の息吹る
 せむむしもわらふ事ありしこと語もりとうくもあどに忘れもやけ
 ぬふふさびひてかの梅園もろをゆくと見えぬありにうり能えまは船の
 氣あはれぬ大い戸め大 御殿は船のうのうのいふ海画ううりやを
 あま映ドうま今の箱月鏡向の完よりゆめの京地をうりやあま積ふ
 うあてとあま板を移すとまふかか事よりや思ひうりて造り初めん
 こと付あま思ひ一は好弘の舟あまのうてまうせ好祖ハ三十ふあて身は
 うりぬあま今よあまうりてあまを渡りて好真もつまて心あれば我を好真

みまわりのきうせぬる

二七



○文化十三年の八月多紀安長法眼の家人と産麻の伝医物産家曾昌啓
 門人とおはまて永代橋を渡りふ川とより水煙を泳ぎあまありあま
 してまともあり見えぬ橋のりをうりて川りやあまを見えぬ白飯の老翁

馬帽子は白き重宝冠して白馬よのりたるが水と三層尺冠をして菊のころり
とりはきく小笠もありて或ころも飾りしと申す所見えたりに
けりとなるは自我も昌徳の子おありてお徳杯しつるお茶の或人より
来りぬづしき事とてさもりあまを始りて奇異の思ひをせり
その村に初長共の志院麻布をよりたるは性来よりあまの思ひを筆
あらんと同じく馬帽子重宝冠の老人馬とて宿をたよりて人よりさり
なりとて来りてしり高徳の徳杯のくさ人ありて同年同月同日
世の稀なる大風かきあまの笠枯葉を吹倒し湖水をくわのりて
風の性来絶つり昭和八年八月初日法師を人少法師を人虚ををたし
せしよし師尊貞丈大人の随筆少あり正史実録といふ所を記し師尊
学風をたぬいそぬ事か天の学者は志をり昔一斎明天皇御代
唐人の如き人喜油冠を龍のりてたしせしありあり戒も龍のりて
天ののりし事記すも中紀もあり

○文化二年伊予守苗与力金田甚志信由先代与力鈴本久吉信由作事を
小林惣右衛門三人品川ある舟長とて舟を借りて釣舟を借りて舟長
とて今年午時におありき風ありて舟のりかんとしと三人きり舟に強て
船を出しぬはさふいふも午時とて此舟の風吹おり忽ち烈々となり
既し船もろくげらんとてさるにあまの船ども品川よのりておせとさぞと
船もさぶれよせざらぬとてさるにあまの船もさる船もさる船もさる
帆をあげて安房のさるしりし酒を酒びておる三人も碑いさふ酒
果て人びりちたもさる舟長の舟に浮かしてあまよげにちらせし舟の
方に見えぬ安房と徳連くありし此舟の船先とてさるしりし西小
の舟も進んで東南より一筋の細風かたりて舟もさる舟長が家の
裏に船もさるにあまの船どもは沖ふありていつくでも見えたり
うるともさる舟の初長の舟と久吉信由の舟と久吉信由の舟と久吉信由
の舟と久吉信由の舟と久吉信由の舟と久吉信由の舟と久吉信由の舟と

つるも大風ふ向して一節の青き風吹らうありおのち終るあやみ
事いあきをあの事そのいぶう〜思ひ〜ふうきたる事いあやみ
あぶりの船人のあやみ事いあやみ年船積しつる船長いあやみ
き物こさう〜も紫式部の内裏女房の身いあやみてわらる事いあやみ
この細き道風より式部の博識を青〜始ありらう

○文政十二年三月ホニ神田久岡よりおの美おらりて大火とありし後
火除の爲に鎮西町に堤築きつり是の近き事いあやみ若人もあやみな
そ後の人のことよりわらりて思ひもあやみはわらりていあやみ

いあやみは○あれいあやみ近き事いあやみ人のあやみ事いあやみかくいあやみ
秋松年長いあやみ保朝臣の神母あやみ君あやみの大和聖妻の種をいあや
をいあやみいあやみいあやみをいあやみいあやみいあやみいあやみ
あやみの神は前徳させいあやみを次の年のま生出あやみをいあやみ
芽いあやみとありてあやみいあやみいあやみいあやみいあやみ

僧いあやみ
おのちいあやみ
すいあやみ
身いあやみ
志いあやみ

人多くれとあや〜き事いあやみあや〜と和泉式部集いあや〜このま
あやらういあや〜いあや〜いあや〜いあや〜いあや〜いあや〜
いあや〜いあや〜いあや〜いあや〜いあや〜いあや〜いあや〜
事いあや〜いあや〜いあや〜いあや〜いあや〜いあや〜いあや〜
聖妻の繫糸いあや〜いあや〜いあや〜いあや〜いあや〜いあや〜
〜いあや〜いあや〜いあや〜いあや〜いあや〜いあや〜いあや〜
権いあや〜いあや〜いあや〜いあや〜いあや〜いあや〜いあや〜
〜いあや〜いあや〜いあや〜いあや〜いあや〜いあや〜いあや〜
あや〜いあや〜いあや〜いあや〜いあや〜いあや〜いあや〜

○當世僧よりト葎〜病を治る法利徳をいあや〜いあや〜ありあやそれを
信〜いあや〜いあや〜いあや〜いあや〜いあや〜いあや〜いあや〜
を病いを治る事いあや〜いあや〜いあや〜いあや〜いあや〜いあや〜
か〜いあや〜いあや〜いあや〜いあや〜いあや〜いあや〜いあや〜

俗にせよとも今この寺に授ふあり合條をねと増もたのと思ふ僧もあらず
 中授よそむり

○年月は是るをねとをき以て徳中屋の藩士此の女妻、徳月の子を授
 小中御うまより醫師段を剃生、の難を療治して母子とも恙
 ありしと昔もこうの國は魏黄初又年汝南屋雍が妻王女を
 徳下より男子を産、年亦老子の八十年母の徳内ありて左腋を割
 て生るより、まゝとまの丸篇あり亦天竺の摩耶夫人が右を
 挙く、花の枝をおんとて右授より釈迦佛生まるといふ、因果縁の
 あり、これをも神代の前よりなるといふべし

○安永天保あとの改いをして、高家は何をといへば、号よりした、
 薬屋筆、墨屋あとのみ、何堂何園あとのり、あり亦、
 麦屋あとのみ、雅なま、色、ありしを、今の料理屋、若る、
 義、何亭何橋何屋何堂何軒あると、儒学者、
 醫師、こと、思、

号をまかり

分て五分
 ありては
 有用あり
 主用あり
 ありては
 ありては
 ありては
 ありては
 ありては

○家の中居るの号を、
 何の号と号する者、
 師徳、
 近き、
 坊を、

あり昔、坊を、
 中子、
 号、
 似、
 義、

○當時之人、
 親、

いふ願多る者を親方としたり源氏縁角、巻ふ親方少ありてあえ終ふ
とあるは白き船に、宮のあらがしきゆ心あま中、君の為といとあしき思ひ
て美中納言の親の如きゆあゆむてのこまも亦曾我物語に親方のいし事と
とあるは三浦、別當が妻の曾我十市祐成が姨の別當が居はるは貞といふ
女を徳成がいのこやうんとてその親の如くあゆむといふあまがあまといふ
親の心は成てといふあゆむとあせといふ異と市流球あゆもいひく皇親の
船の國にけりといふ付、船人たがそ船改まるとして親方といふをゆめ
敬ふべき人を親方といふと思ひてと官をさして親方といひてをゆめ
官名のゆめとあゆむと官の者自分より何親方と名の事といふあゆむ
○昔人の厄年といふ事ある事とたゆありても陰陽師修験者あゆむ
活斗の為といひしゆせし靈樞陰陽經ふ七歳 十歳 三歳に歳 四歳
三歳 五歳二歳 七歳一歳こまを大忌といふ不可不自安之感時病
引夫見憂夫當は時を為事今ハ男々二拾八歳 四拾二歳女々十九歳

三拾三歳を厄年とせり亦祝年ハ男女ともふ拾歳以て十年毎に祝ひ
ありとい代々の撰集のお養とて何ありきまを近來の年賀ハ拾二歳
み拾歳七拾一歳を中卦返りといひ七拾七歳を喜字といひ八拾八歳を末
とひて祝年とせり中めを厄年と等しきもあまといふ終りて中
八拾八歳を末とせり後世の事といひく末の祝ハ八拾歳之樞窓自語
云は條隆彦ハ樞窓納言ハ二位依勅書末字法人也後八十七拾八人と
あると延文章仲の事と運赤色末集ハ末年八十歳之幸庵對話ハ
八拾八歳とて俗家とて末字といふハ得之堂とあハ九拾八歳と末ハ八拾八と
とありきまといふの世のありといふは随ふをよめしき

拾年當作十

○當世正月元日然る寶船の繪をありてを買て元日、夜枕のりあゆ
初夢ふ吉事をを見しといふ今ハ二日の噴あゆをんたたてて二日の初夢と
思ふ人もあまといふ二日あゆもいふ人ありといふ事と海邊の是書
お目く 大永天文 永禄のな 貞孝と稱進若江の御船繪所ハ當不上と京小川麻屋とい

被書くは亦その後野法眼舟子小作右近と申ふうせしるる後亦公方
 光源院殿代某福ふ新又舟御船繪の事公方極と御基所ハ大引合
 御船或り亦御造子御造子御所めて小引合上層中層兼女近ハ杉原又入
 波舟允洞進或付良分洞作名御入山ハ御所くこの船不足りく御福ふ
 繪等持て多きことと二條ま白局極めて御船画き被書分御船等
 相所保音繪易くして御ゆふとありわをことそひらめて元日のわりの
 あしきりくし

一
 二
 三
 四



永仁年中の古画 縮図
 右舟波と忠奉朝臣所藏



松平長門守定保朝臣所藏
筆者并時代未詳

右のち國の當國の時いりて異に永仁より大永迄或百二十年と承り

今年まで三百餘年船年承にり今年迄都合五百餘年と

○唐茹子^{カニボ}を東浦^{ナヤ}寨國^{ナヤ}してボウブラト^{ナヤ}は凡之安永の成せよめばりき
おふ思ひて悦びてらひり貞丈^{ナヤ}の成り我知かり若冠の成り保
年申込の市より賣う^{ナヤ}ばあき^{ナヤ}を毒物あるん^{ナヤ}そ^{ナヤ}ら^{ナヤ}り^{ナヤ}を元文
の成りり^{ナヤ}極て^{ナヤ}多^{ナヤ}あり^{ナヤ}とい^{ナヤ}も^{ナヤ}あり^{ナヤ}今^{ナヤ}人^{ナヤ}好^{ナヤ}そ^{ナヤ}り
い^{ナヤ}も^{ナヤ}若^{ナヤ}き^{ナヤ}女^{ナヤ}の^{ナヤ}好^{ナヤ}む^{ナヤ}もの^{ナヤ}

○まのゆいももとの琉球國のおつて皇國あ^{ナヤ}ら^{ナヤ}り^{ナヤ}を享保の成りしを
交^{ナヤ}り^{ナヤ}て^{ナヤ}終^{ナヤ}國^{ナヤ}高^{ナヤ}飾^{ナヤ}那^{ナヤ}馬^{ナヤ}配^{ナヤ}村^{ナヤ}百姓^{ナヤ}若^{ナヤ}成^{ナヤ}とい^{ナヤ}者^{ナヤ}初^{ナヤ}極^{ナヤ}生^{ナヤ}して
國^{ナヤ}易^{ナヤ}と^{ナヤ}あ^{ナヤ}り^{ナヤ}より^{ナヤ}て^{ナヤ}そ^{ナヤ}を^{ナヤ}後^{ナヤ}ふ^{ナヤ}御^{ナヤ}旗^{ナヤ}中^{ナヤ}の^{ナヤ}列^{ナヤ}ふ^{ナヤ}加^{ナヤ}ら^{ナヤ}ん^{ナヤ}て^{ナヤ}當^{ナヤ}附^{ナヤ}
ま^{ナヤ}は^{ナヤ}若^{ナヤ}成^{ナヤ}後^{ナヤ}とい^{ナヤ}米^{ナヤ}穀^{ナヤ}の^{ナヤ}御^{ナヤ}成^{ナヤ}と^{ナヤ}あ^{ナヤ}ら^{ナヤ}り^{ナヤ}製^{ナヤ}成^{ナヤ}て^{ナヤ}高^{ナヤ}と^{ナヤ}あ^{ナヤ}り^{ナヤ}菓^{ナヤ}子^{ナヤ}
ち^{ナヤ}酒^{ナヤ}と^{ナヤ}あ^{ナヤ}ら^{ナヤ}御^{ナヤ}成^{ナヤ}の^{ナヤ}お^{ナヤ}こ^{ナヤ}も^{ナヤ}若^{ナヤ}成^{ナヤ}女^{ナヤ}の^{ナヤ}身^{ナヤ}より^{ナヤ}極^{ナヤ}と^{ナヤ}い^{ナヤ}の
あり

此百餘年船と
いふは文
シハの魚回
後、なま
い、人、を
い、先、生、を
せ、り、あ、む

と巻小菅沖殿の事... 川の色...
しを浦とよむ... 考まがせ...
のめく... 深川...
あてどあり... 紫雲海苔...
しきらん... 割取...
り地名も...
との向を...
ありん

昔一物を買て... 現今といひ...
ど現今を...
天下ふひ...
衆の...
徳の...
軍終海師
伊東陵舎

めづしきを現儀... 飯は...

正月元日... 常... 兼食...
人あり... 常... 兼食...
休息... 兼食...
神代... 飯...
その... 正月...
あはれ... 祝辞...
いそえ...

神代照波下巻終

年老き人此むうしづりをせせのき今世世とよきあまはる
うりふたをばはる事ありしやと父翁ふとバ志うりあまを見よと
あはれ之をを見せ給へる字ありて一に禮はる世ありあまはる
とあまはるえはる禮を授けよとあまはるうりあまはるあまはる
のせしむるをよきや神代あまはるあまはる

嘉永三庚戌年六月

豊治

安政五年戊午四月上院流覽一校

活東子

明治二十年丁亥晩夏

筆者

妻木頼徳



